

全国同人雑誌最優秀賞

第17回 まほろば賞 発表

二〇二一年からまほろば賞は全国同人雑誌協会と文芸思潮が主催することになりました。今後もこの形で進めさせていただきますので、どうぞよろしく願います。

第一七回新全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、二〇二三年七月九日にハドル・スペース自由が丘において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって慎重に審議が行なわれました。作品ごとに各選考委員が深く批評し、熱い議論が交わされました。厳正な審査の結果、左記のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また全国からの読者の投票と寄付による読者賞の投票および内容の結果も併せてここに掲載させていただきます。

一昨年から、「まほろば賞」は受賞作品には、賞状と賞金三十万円（賞金は主に寄付によるものです。また二人同時受賞の場合は、恐れ入りますが、一人二十万円とさせていただきます）および記念トロフィーを贈らせていただく

ことになりました。河林満賞にもそれぞれ賞状と賞金十万円と記念品を、また読者賞には投票賞金と優秀賞賞金五万円および記念品を贈らせていただきます。優秀賞にも記念品と賞金五万円を贈らせていただきます。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの方の同人雑誌の作品が全国同人協会・全国同人雑誌振興会及び文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。

また、どうぞ作品の推薦にもいっそう多数の方が御参加くださるようお願いいたします。また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの手でこの賞を盛り上げ、育てていただきたいと思います。全国の同人雑誌諸氏の御参加と御支持を切に願います。次第です。

またこの結果及び選評とその感想・批評の動画、また優秀作品はインターネット「文芸思潮」ホームページでも発表される予定です。どうぞ御覧ください。

第17回全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

「エリザベトを選んで」

〔白鴉〕33号

蒔田あお

特別賞

「浜辺のリズ」

〔黄色い潜水艦〕75号

藤本あずさ

河林満賞

「青山墓地の桜」

〔槇〕45号

萩原紫香

五十嵐勉賞

「血の湯」

〔繫〕3号

寺本親平

読者賞

「見返り」

〔季刊作家〕100号

佐藤文平

「枯野」

〔季刊作家〕100号

祖父江次郎

優秀賞

「白詰草」

〔季刊午前〕60号 西田宣子

まほろば賞賞金は、木内是壽氏、故蘭藍子氏、三田村博史氏、故原石寛氏、夏目日美子氏、前岡光明氏、今田真理子氏、二宮英郷氏、堀井清氏、西島雅博氏、高橋惟文氏、勝又浩氏、越山しづか氏、「北斗」などの御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「狐火」「安藝文学」「べん」「海」「文芸中部」など文芸思潮同人誌団体会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。

選評



みた まさひろ
1948 大阪生まれ
早稲田大学文学部卒
77「僕って何」で芥川賞受賞
作品はほかに「いちご同盟」
「空海」「親鸞」など
最近の本「遠き春の日々」
「少年空海アインシュタイン時
空を超える」「天海」「善鸞」
日本文藝家協会副理事長
武蔵野大学名誉教授

同人雑誌の充実ぶり

三田誠広

どの候補作も文章が安定していて作品としてのレベルが高く、昨今の同人誌の充実ぶりを実感できた。掲載順に感想を書く。「白詰草」（西田宣子）は二組の高齢者夫婦の日常を丹念に描いた佳品で、手並みが鮮やかで過不足がない。片方の妻と他方の夫が絵画を描く点で接点があるのだが、芸術小説という感じではなく、淡々とした日常が描かれる。画家の妻が病気になるったり、孫の結婚の話が出てくる場面もあるのだが、それもありふれた日常風景にすぎない。小説としての盛り上がりには欠けるのだが、こういう

小説があってもいいと感じさせる。

候補作の中で異色と感じられたのは「血の湯」（寺本親平）で、平家琵琶や説教節を思わせる幻想の世界に読む者をいざなう不思議な作品だ。ストーリーのない散文詩的な展開で、独特の語り口で恐ろしいことが語られる。その文体の強度には驚かされるし、ユニークであるということは評価されなければならない。ただユニークすぎて理解が及ばないところがあることも確かで、五十嵐勉さんの強い推奨があったが、他の選考委員の賛同は得られなかったし、よく自身も強くは推せなかった。語り手が抱えている業のようなものもつと描かれていればと惜しまれる。

次の二作は同じ同人誌の掲載作で、妻のいない高齢者男性が二人ずつ出てくるという点でも共通している。ほくも今年、後期高齢者になった。まだ妻は健在だが、もし一人きりになったらこういう状態になるのだろうか、身につまされる思いで読み進んだ。女性の方が長生きするので、男性の高齢者が一人取り残されるというのは少数派だろうが、それだけに悲惨さが際立つように思われる。二作とも男性高齢者の一人暮らしのわびしさが細部に渡って描き出されていて、逃れがたいリアリティーをもって読者に迫っていく。「見返り」（佐藤文平）はテンポよくプロットが展開する秀作で、書き手の技術力の確かさが感じられる。最後に到って主人公の妻の過去が明かされるという仕掛け

があつて、そこが読みどころでもあるのだが、やや通俗的なオチになってしまった。「枯野」（祖父江次郎）は野良猫を飼う話や、競輪場の寂しい風景なども描かれるのだが、プロットというほどのものではなく、老人二人の哀れな末路が淡々と描かれる。救いのない独居老人のありのままの現実がつきつけられて息が詰まるようだ。けっして楽しい作品ではないが、これが純文学だと思わせる訴求力がある。

河林満賞を受けた「青山墓地の桜」（萩原紫香）は終戦直後の米兵の現地妻と、近所の少女の交流を描いたもので、おそらくその少女は書き手自身と重なるのだろう。世間から白眼視される立場の現地妻の女性も、英語ができるくらいだから育ちのよい人なのだろう。終戦直後の就職難の時代には、女性の仕事も限られていて、教養がありながら米兵相手のホステスや現地妻になる女性も少なくなかったはずだ。大人たちからは批判の対象となる現地妻の女性も、偏見のない少女の目には素敵なお姉さんと感じられる。そんなありのままの姿を少女の視点で素直に描いてみせた書き手の筆致に好感がもてる。それだけにそのお姉さんが胎児を宿したまま自殺を遂げる結末には痛切なものがある。受賞に相応しい見事な作品だ。終戦直後の東京の民家のようすが細部にわたってきつちりと描かれていて、歴史的な証言という点でも高く評価できる作品だ。

特別賞となった「浜辺のリズ」（藤本あずさ）は短い作

品で、一読しただけでは印象のうすいエッセーふうの作品と感じられたのだが、丹念に読み返すと細部が輝き始める。津波で飼い主を失った犬を保護して、老人を癒すセラピー犬としての訓練を受けさせるという導入部は、ただの犬の話ではないかと危惧されるのだが、やがて筋萎縮性側索硬化症という重病を負った女性と、犬を通じて交流するという展開になって、読者は改めてこの作品の重さに気づくことになる。言葉を活けない重病人と、物言わぬ犬との間に不思議な魂の交流のようなものが芽生えていく。そこまで読み進むと、この犬が津波という地獄を体験した生命であり、一方で身動きできないという業苦を負った患者がいて、そこに言葉を越えた何かが通じ合っていくということの不思議さが見えてくる。軽いエッセーと見えた短篇に、驚くほどの重いテーマが秘められている。

まほろば賞に輝いた「エリザベトを選んで」（蒔田あお）は冒頭の食肉加工の作業場で働くヒロインの姿がまず印象的だった。このようなオーブンニングの小説は珍しいのではない。やがてこの女性の不幸な生い立ちが語られて、なぜ彼女が食肉加工に従事するようになったかが明らかにされる。ふつうの女性らしい幸福には目もくれずに地味に生きようとする彼女の生き方に共感できるし、読者のほくは傍観者にすぎないのだが、頑張って生き抜いてほしいと思わずにはいられない。だが作者はこの女性をさらに不幸な

境遇に導いていく。プロットの一つ一つがリアルに描写されているので説得力があり、読者はこの女性に寄り添って不幸な境遇を追体験していくことになる。最後にわずかな救いとして、宗教的なテーマが立ち現れるのだが、下手に描くと理屈っぽく感じられる聖書の引用が、関西弁のいきいきとした会話とともに提出されるため、読者の胸に素直に入り込んできて、深い感動をもたらす。この作品に出会えてよかったと思わずにはいられない。



こはま きよし
1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マ
ネージャーを務めるかたわら
文学修行
88「風の河」で文学界新人賞
を受賞
他の作品に「消える島」「後
生橋」「光の群れ」「火の闇」
などがある

圧倒する力量と迫力

小浜清志

受賞作となった「エリザベトを選んで」・「藤田あおの作品は他を圧倒する力量と迫力で全員一致で受賞作となった。主人公土屋珠季と来栖陽平のかんりの年齢差結婚からこの

作品は始まり、徐々にある方向へと崩れていくのであるが、その方法と表現には巧みな工夫が加えられており、自然と作品の世界へ引きずり込まれていく。

珠季が高校三年の七月に母と弟が無理心中するという事件が起きた。このことを機に珠季は罪を背負ったような生き方を選ぶ。食品会社の肉をスライスする女性労働者として暮らしている珠季は、同じような過去を持つ陽平と付き合い結婚式を挙げるのだが、式場の教会が重要な伏線となつてこの作品の重厚さにつながっていくのは見事である。十九才も年上である妻と夫の不釣り合いは陽平が会社をくびになってから露見する。出産から五ヶ月のある日陽平は得意先のスーパーの売り場マネージャーを殴る事件を起し、会社を解雇され三日三晩布団の中でふさぎこみそのあとふらりと家を出て一週間行方をくらませる。そこから崩壊が速度を増し珠季の病氣と相まって読むのも辛くなる展開がくり広げられる。陽平は父親という意識があまりなく珠季にもたれかかっているが、当の珠季はがんを宣告され生きる望みすら奪われようとするが、結婚式を挙げたときの教会の牧師との再会で宗教に頼っていくことで希望を見出すという結末になっている。年の差婚から不条理は広がり、坂を転げ落ちるような生活からキリスト教に救いを求めるという構図は少しあざといとは思ったけれども文章の力でここまで作りあげたのは見事である。

次に私が感銘を受けた作品は「白詰草」西田宣子である。主人公の果林は現在七十五歳で三十五才の時から毎年県展に絵を応募しつづけている。絵の対象はバラや百合ではなく地味な草や花しか興味がわかない。そして、彼女の交友関係も地味である。知り合ってから四十年になる喫茶店「夢」の店主の須美は五十代で重一さんというパートナーを得て今でも現役で店をきりもりしているが、果林の娘の千夜にいずれは店をゆずるつもりでいる。重一さんは全国的にかなり有名な画家であるが果林は絵のアドバイスを一度も受けようとせず、毎年の応募作にはシロツメクサをしきつめた「白花」というタイトルであるが、その絵の中に三人の女を描こうとしている。大切な者たちを守り、着実に人生の時を過ごす草のような女の姿を果林は描きたいと思っている。十二月の半ばになって須美が倒れたという連絡を重一さんから受ける。もう八十才になる須美であるから果林は夫と共に病院にかけつける。入院のゴタゴタの中で果林は老いをより身近かに感じ、夫とも初めて納骨の事など話し合う。最後は孫である可奈の結婚相手に二人の親が反対をしているとの相談を受ける。ともかく相手の青年と会ってみることにして「夢」で会う日時を決めるところで終わる。この作品の良さはまず誠実である。どこを見てどこに気を配ればいいのかをきちんとわきまえていて清々しい。

「見返り」佐藤文平も丁寧な筆致に好感が持てた。同期入所の三国民雄から思いがけない便りを受け取る。個人的な付き合いがあった訳でもなく、せいぜい一年一回のOB会で顔を合わせるほどの関係ではないが、上京する用があるので貴兄の都合のいい日に亡くなった奥さんに線香をあげに行きたいとのこと。桜井は亡き妻の遺影に手を合わせ手紙の内容を伝えると、なつかしいお名前ね、でも私たちを引き合わせた恩人にはちがいないから歓待してあげてねとささやかれた気がした。入所して十四、五年経験を積むと係長への昇進の話が出るが、三国は親が政治家ということとで一番のりを果たしたと上司から知らされた矢先に二人で日帰りの出張に行くことになる。その帰り道三国の運転中に自損事故を起こしてしまう。すると三国は土下座までして桜井、お前がやったことにしてくれと懇願する。係長内定を取り下げられるかもしれない三国の頼みを桜井はしぶしぶ受け入れてしまう。「その代わり、見返りは必ずきちんとさせてもらうから」と彼は言った。三国のその言葉はあてにしていなかったが、数ヶ月経って三国から手紙が届いた。それによると庶務課の細川菊恵さんから手紙でも打ち明けられたことだが、彼女は桜井との交際を希望しているとのこと。さり気なく映画にでも誘えばと答えたが、このことは彼女には内緒にしてくださいとのこと。手紙の通り映画の誘いを受ける。そして、二人の仲が深まり互いに

なくてはならない存在になる。そして三国から二通目の手紙が届いた。それによると細川菊恵から感謝の言葉があったとのこと、月下氷人のまねごとみたいなものですが、これで何とか収めてもらったら助かります、と綴られていた。見返りとはそういうことだったのかと納得する。やがて二人は結婚し子供もできたが、妻はガンで先立つ。そして、三国との再会になるが、出張帰りの事故も菊恵を紹介したのも全て三国の思いつきだったとのタネ明かしで終わる。それだけではなく、もう一工夫できなかったか残念である。「枯野」祖父江次郎も老年を描いている。武雄は妻の一周忌をすませてから猫の鳴き声を聞くようになった。玄関横のガラス戸に寂しげに猫の姿が映る。扉を開けると部屋をのぞいている。中に入れてアジの煮付けを出した。その日を境に猫は自由に出入りをするようになる描写を加えながら、老いた男の一人暮らしを淡々と描いていく。それはまさしく枯れた日々が続く枯野になるように見えてくる。スーパーへ出かけいつもの椅子で世間を眺める老人の目にも輝きはしない。だが、小堺という中学の同級生と再会してから枯野に陽差しがあたるように武雄の生活も彩りを帯びてくるが、所詮は老人同志の行動であり会話である。競輪場の出入りをするようになってから武雄と小堺の間にかつてあった溝がなくなり孤独感もうすらいでいくが、小堺の死で枯野がふたたび広がっていく淋しさが襲ってきた。



いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
早稲田大学文学部文芸科卒
79「流瀆の島」群像新人長編小説賞
84-90 カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長
主著「緑の手紙」(読売新聞・NTT プリンテック「インターネット文芸」最優秀賞)・「鉄の光」「ノンちゃん、NONGCHAN」(聖丘寺院へ)「破壊者たち」

芥川賞を凌駕する充実感

五十嵐勉

第一七回まほろば賞も中身の濃い作品が揃った。全国の同人雑誌から上がってくる優秀作品の読みこたえは、最近の芥川賞作品よりもはるかに充実感があり、凌駕する内質を有している。商業文芸誌の質的凋落と、文芸出版体制の衰微を、現状としてこれらの作品の前に感じるとき、文芸創作をどのように再構築していくべきか、考え直すにはいられない。世の中にはもっと掘り出して広めるべき作品があり、共有すべき高いレベルの文学作品があることをあらためて感じた。

受賞作の蒔田あお氏の「エリザベトを選んで」は、特に重厚な作品で、運命の果てに痛に冒される緊迫感は、圧倒

「青山墓地の桜」萩原紫香は記憶に残る作品であった。戦後にはアメリカ兵と関係をもつ女性があちこちにいた。その一人である女性と知り合った私は毎日のように遊びに行っていたが、ある日汚い言葉を浴びせてしまう。幼いがゆえの配慮を欠いた言葉の後悔は時を経て消えることなくまといつく。それから間もなくして彼女の飼っていた犬がわが家に来た。祖母が言うにはお姉さんは遠くへ行つたとの事。「私」はアメリカへ行つたものだと思い込んでいたが、その犬が死んだときに母から真相を知らされ、自分の吐いた言葉がどれほどお姉さんを傷つけたか後悔に苛まれる。お姉さんの自死は想像するだけで淋しい。

「浜辺のリズ」藤本あずさは、透明感のある作品である。東日本大震災の被災犬であるリズと、ALSという難病をわずらっている真由美さんと、飼われているハッピーという犬との交流を描いているが、暗い方へ流れるのではなく、むしろさわやかな展開が心地よく、作者の手柄がかい間見える気がする。

「血の湯」寺本親平は、透徹した観念の膨らみには脱帽するしかない。

的な迫力を備えている。少女期、障害を抱えた息子を連れて自殺し、自分を身寄りのない者として置いていった母の追いつめられた状況が、その時点で主人公の運命を決めたと同時に、のち自分もその同じ状況に陥っていくところに、この筆者の鋭く深い構想力が示され、文学造形の非凡な掘削力を感じる。普通は少女期と結婚期、子育て期とをこのようには重ねない。しかし蒔田氏は、運命の苛烈さを描く手を緩めることなく、限界まで追い詰めていく。この烈しい収斂性は、生粋の文学者魂を示して、煌めいている。

主人公が末期の膀胱癌で死ななければならぬその緊迫性の中に、教会で主人公を導く牧師も同じ末期癌で、この世界から消えていく運命の一つの同期性のうちに、救いを強くするが、そこにしか希望がない、この希求の強さに、作品の眩しい発光がある。時間が少し飛ぶ結節部分にいくらかギクシャクした流れの淀みも感じられるが、いずれこの筆者は逆にそれを長篇の新しい手法として生かしていくような、大きな可能性が感じられる。期待できる作家だ。

特別賞の藤本あずさ氏の「浜辺のリズ」は、寝たきりの重度の障害者を、犬の世話を通じて訪問ヘルプするストーリーだが、すでに言葉が喋れず、キーボードでの画面表示によって意思を疎通させるだけのコミュニケーションの新しさも新鮮で、それによって逆に内面や本音が露出する側面もあり、その斬新さは確かにある。しかしその奥深

いところは、結局肉薄でさず、むしろ犬によってある生物的な共感を響かせ合うに留まっている。救われているのは、津波で飼い主や家を失い、浜辺を彷徨っている犬の姿が、身体を失って生き物としての最低の生存のなかでの障害者の孤独感に重なってくるところだが、これは筆者の底にある優しさによってしつかりした基盤を得た、一種の迂回による成功となっている。そこに幸運な結節がある。しかし作者が今後どこまでこの世界を追求していけるかは、未知数である。

作品に漲る感情の一貫性では、萩原紫香氏の「青山墓地の桜」に深い痛切さを覚えた。戦後間もなくアメリカ軍の駐留部隊の米兵と親しくなったうら若い女性の悲劇に、まだ分別のつかない子供の立場から接したことによって、いっそう犠牲になった一人の女性の姿が鮮やかに浮かび上がってくる。当時アメリカ軍の駐留した場所がよく聞かれた話、よくあったことでありながら、ここまで鮮やかに人間として浮かび上がらせた物語には初めて接した気がした。これを読むといつまでもその女性の姿と、戦後の情景が胸深く残るだろう。その意味で、意義深い文学作品となったことに、拍手を惜しまない。

寺本親平氏の「血の湯」は、近年例を見ない超リアルリズムの異界譚である。普通の描写を一切捨てて、超現実の世界に直接入っていく切り込みは、呪術・祈祷の領域まで踏

み込む根源的な世界を浮かび上がらせている。我々の血の中に潜む、修羅や奇形や悲劇の深い流動の深淵を見せてくれる。生き物としての血の渦の根源を覗かせる描写は、日常の幕を暴いて、血の業としての合流を生命回帰の還流の姿で、宇宙の中に再生させていく。こういう世界が造形できるのは、何よりも筆者が薩摩琵琶奏者であり、平家物語に息づく戦乱の血の怨みを体感しているからだだろう。泉鏡花の系譜とも言えるこれは、筆者でなければ書けない世界であり、現代こういうものが忘れ去られていく時代趨勢の中では、特に貴重としなければならない緊要性から、「五十嵐勉賞」を贈った。

読者賞の佐藤文平氏「見返り」と、同じく祖父江次郎氏「枯野」は、どちらも晩年の世界を鮮やかに描いて、人生の終わりに見えてくる生の風景を呈示している。

「見返り」は、妻が死んでの数十年ぶりに訪ねてきた同僚の告白を聞くという設定だが、その告白の内容が実は妻がその同僚の前の恋人で、政治的欲得でその彼女を捨てて、主人公に乗り換えることを勧めて縁を持たせたというショッキングな内容である。これは同僚も末期癌で命は長くないことを前提にした、一生を振り返る告白であるだけに、起こり得る人生最後の秘密の暴きでもある。老練で緊密な筆致は、晩年の衝撃的な告白を普遍的な生の振り返りに止揚している。読ませる文章には、高い技術を感じた。

の作品が突き付けてきていることを、感じさせる今回の選考だった。



なかがみ のり
1971 東京生まれ
ハワイ大学美術学部卒業
99「イラワジの赤い花 ミャンマーの旅」(集英社)を上梓
同年「彼女のブレンカ」(集英社)
ですばる文学賞受賞
「悪霊」(毎日新聞社)「いつか物語になるまで」(晶文社)「夢の船旅—父中上健次と熊野—」(河出書房新社)「アジア熱」(大田出版)「シャーマンが歌う夜」(水の宴)(集英社)「海の宮」(新潮社)「熊野物語」(平凡社)「天狗の回路」(筑摩書房)など著作多数

痛みと共に生きるまほろば賞

中上紀

西田宣子氏の「白詰草」も、画家として創作を続けてきた主人公が、老年という生を終える状況に近づいて、一つの軌跡の意味を問いかける小説である。この年になって初めて見えてくる風景が確かにある。それは老年のたわわな果実として、あらためて生を問う機会に恵まれる。その問いの前にどう答え、どう姿勢を整えるか、長い人生の終焉に臨んで、文学だけが持つ問いの深まりが、この作品にはある。他の身近な人々の人生模様に重ねてそれがさらに迫ってくる鮮やかさが、この作品の美点であろう。

同人雑誌には優れた作品がある。これらをどうたくさん読者に普遍化するか。文芸作品の表現手段や出版による流通は、現在大きな岐路に差し掛かっている。優れた作品をどのようにすれば、多くの読者が手に取り、味わえるようにすることができるか——この課題をあらためて、七篇

第一七回まほろば賞の候補作品は、いつもより多く七作品であった。選考会では、掲載順に一作一作選考委員が各自意見を述べていったが、熱く語り合ったその時同様に、掲載順に評を記すことにする。

西田宣子氏の「白詰草」では、包みこむような文章が、高齢と言われる年齢に差し掛かる主人公、そして家族や友人、周りの人々の人間模様を、絵画に描かれる花になぞらえる。花はバラやユリのように華やかでも色鮮やかでもな

く、「田の畔や道端や河川敷などの地味な花」だ。主人公はそれをへそ曲がりだと言うが、清々しいほどに立派なそのこだわりは、本作を貫く一本の軸となっている。どこにもあるような場所でひっそりと咲くシロツメクサを描く姿に、この人生はなんてことのない、どこにでもある人生なのだということ、だからこそ尊いのだということが、堂々と示される。絵の中に詰め込まれた他の登場人物たちの生き方も見逃せない。友人・須美の夫である重一は、アマチュアの彼女とは異なり、プロの画家としては華々しい人生を送ってきた。でも彼にも、屋久島の巨大杉のように描ききれないものがある。「描けるだけ誠実に書けばいい。書けるだけ誠実に書けばいい」という言葉が、小説の書き手である著者自身へのエールのように残る。

五十嵐勉賞を受賞した寺本親平氏の「血の湯」には、圧倒的な「語り」の力を感じた。読み手の心の奥底の繊細な部分に、語りかけてくるような作品だ。奇形で生まれて亡くなった子らの後を追うように死んだ妻を、男はどこまでも追っていく。さながら、日本神話で、イザナギが、蛭子神を産み火神を産んで亡くなった妻のイザナミを、黄泉の国まで追っていったように。琵琶の音色に誘われて、男はどんどん深みへと進んでいく。宿を訪れ、湯に漬かり、地底湖に吸い込まれ、岩屋へとたどり着く。それらのすべては血に塗れており、男はそこで悲惨な自身の過去と対峙

なった。そこで主人公は裕福だった小堺の破滅を目の当たりにしていく。武雄が味わっている日々の味気なさや孤独は他者とのかわりを避けて生きてきた自分自身が選び取ったものだが、だからこそ生々しく突きつけられ、人生とは、高齢になることとは、どういふことなのか改めて考えさせられる作品だった。

今回の候補作には、ベツトを飼っている主人公が多かったが、この奇妙な共通点は、何かを意味しているのだろうか。河林満賞を受賞した萩原紫香氏の「青山墓地の桜」にも、ハナという犬が登場する。本作では、洗練された都会といったイメージの今の様子からは考えもつかない、戦後の麻布界隈の姿が、幼い女の子の視点でヴィヴィッドに描かれる。それはひと言で言えば、進駐軍の兵隊たちの姿であり、生きるために彼らを頼らざるを得なかった、女性たちの姿だ。女の子は、ハナの犬友達のペスの飼い主である「お姉さん」と親しくなるが、彼女もそんな女性たちの一人。最後に待ち受ける、絶望による悲劇はショッキングであるが、当時は珍しい話ではなかったのかもしれない。「あの人も戦死したのと同じことだよ」という、女の子の祖母の言葉が突き刺さる。戦争によって一番苦しんだのは、女性や子どもなどの弱者たちだ。そのか細い声を救い上げ、物語として伝えていくことは、小説の大切な役割である。

犬が出てくるもう一つの作品は、藤本あずさ氏の「浜辺

する。やがてその血は龍に姿を変えて天へと上っていく。あの世ともこの世ともつかない世界が、おどろおどろしくも幻想的に描かれた作品だった。これでもかというほど「血」が出てくるが、決して血なまぐさはない。琵琶の音の余韻が美しい。

「高齢者」の主人公が昔を振り返る、あるいは妻が亡くなる、というパターンが、今回の候補作には多かった。高齢になるということは、あの世への扉がぼんやりとでも見えてきているということだ。故に、主人公たちは過去を振り返り、避けてきた痛みと対峙したり、愛した人との別れを思い出したりするのもかもしれない。佐藤文平氏の「見返り」で桜井が受け取った葉書に記された旧友三國からのメッセージは、まるで過去からの呼び声のようだ。妻子に愛想をつかされ、天涯孤独となった三國は、衝撃的な秘密を桜井に告げる。一方で桜井の妻菊江は、秘密を墓場まで持っていた。過去への向き合い方としては、どちらが潔いのだろう。深く考えさせられる小説だ。

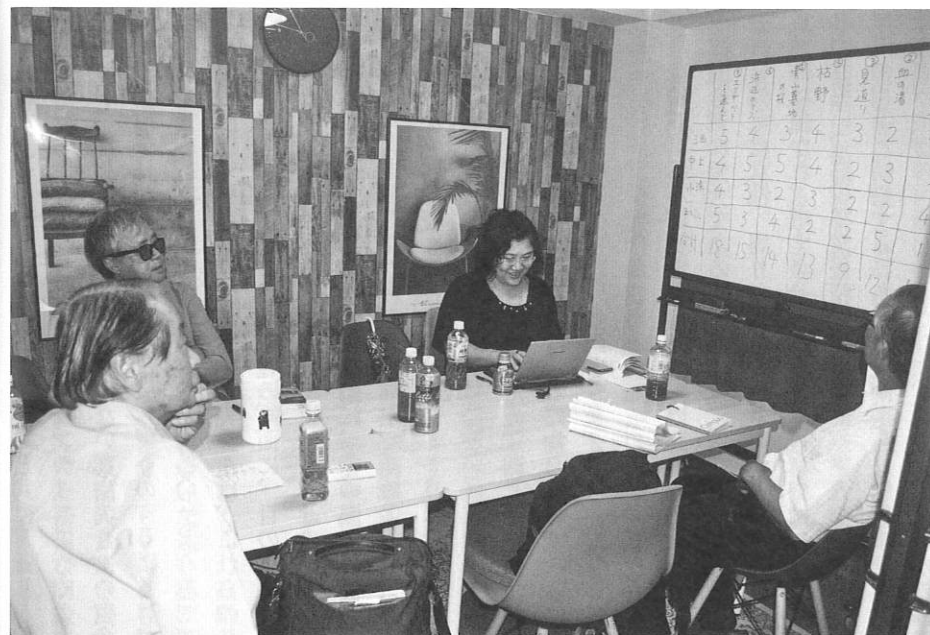
祖父江次郎氏の「枯野」の武雄も、妻を亡くした高齢者だ。娘もとうに家を出、古い家屋で住み着いた迷い猫の世話をしながら細々と年金で暮らしている。することもなく、近くのスーパーに出かけて長居し、半額の弁当を買う毎日だが、ある日かつて自分をいじめていた裕福な同級生小堺と再会し、酒を飲んだり競馬へ行ったりするように

のリス」だ。主人公はセラピー犬のリスと共に、ALSという難病を持つ真由美さんの家にボランティアに行くようになるが、目しか動かすことの出来ない真由美さんの生命力が強く胸を打つ。真由美さんは「へちまのうりよく」で自身の犬であるハッピーと話が出来る、リスとも「うみで」話したと言う。不思議なのは、真由美さんは、これらのことをベッドに備え付けのパソコンの画面に、目の動きでひらがなだけを打ち込んで表した。小説にも、その言葉通りの文字しか、記されていない。なのに、その限られた文字の間から、真由美さんの声がこぼれ出てくるような気がする。それが感動となつて押し寄せてくる。リスは、震災で飼い主を亡くした犬で、ショックでひどい状態だったのを主人公が引き取った。人間が受けたのと同じ恐怖や悲しみを、あの震災で動物たちも受けた。だから、皆で一緒に幸せになろう、なるべきだ。そのようなメッセージも併せて伝わる、特別賞受賞作品である。

最後に、まほろば賞を受賞したのは蒔田あお氏の「エリザベトを選んで」である。本作には、宗教と、たくさんの過去を抱えた女性、周りの人々の生き方が、二章に分けて重層的に描かれ、考えさせられる。第一章では、母と弟を心中で失い、高校卒業後精肉工場で働く主人公の珠季は、年下の相手と結婚するにあたり牧師から〈結婚講座〉を受けるが、聖書の言葉を学ぶたびに、過去の出来事が映像の

ように立ち現れる。言葉の一つ一つを噛みしめ、深く考える彼女の様子に、読み手も自身の過去を振り返りたくなる。第二章では、子を産んだ珠季が不治の病にかかる。若すぎる故の未熟さか、父親になり切れない夫は我が子を虐待してしまう。宗教を扱っているけれども、壮大な何かというよりは、ただ叫び出したいほどの痛みから解放されるために頼る場所としてそこに在る。彼女を心配し、就職を世話した高校の先生のように。やるせなさや痛々しさ、それでも生きるということの、強さと弱さが伝わってくる、受賞にふさわしい作品だ。

読めば読むほど愛着が湧く力作ばかりであった。



第17回まほろば賞選考会風景 2023.7.9 自由が丘「ハドル・スペース」にて

まほろば賞

「エリザベトを選んで」

(「白鴉」33号)



蒔田あお



蒔田あお

まきた あお

1973 大阪府吹田市生まれ
滋賀県大津市在住
2000 年京都市立芸術大学大学院修了後、高校中学校などで美術科の講師として教鞭を執る
大阪文学学校で小説の作法を習い、2010 頃から小説を書き始める
現在、同人誌『白鴉』会員 同人仲間と切磋琢磨しながら執筆活動中

まほろば賞 受賞の言葉 蒔田あお

小説を書くこうと思いついたときからずっと長編志向でした。自分が書くならば、人の一生にどっぷり浸かるような読書体験をしてもらいたいです。白鴉の同人の皆さんは、そんな面倒くさい私の志向にも付き合ってくださる批評精神の高い人たちです。

しかし、最近の時短の風潮——配信に合わせたイントロの短い楽曲や、映画・ドラマの倍速視聴——に心が折れかけていました。同人誌を作っても短編の方が感想をもらいやすく、考えを改めなければと思っていたところの〈まほろば賞〉受賞の連絡でした。ありがとうございます。まだ好きなように書いていいと言ってもらえたような気がしました。



特別賞 受賞の言葉 藤本あずさ

「まほろば賞」特別賞ありますがどうございます。大変うれしく光栄に存じます。十年近く前だと思いますが、こちらの銀華文学賞に応募し、最終選考に残ったという知らせを受けたことがあります。その時は受賞には至らなかつたので、その頃からは上達したのかな、と思うと感慨深いものがあります。

小説を本格的に書き始めたのはカルチャー教室でした。その後大阪文学学校に二年間お世話になりました。最初の教室でご指導いただいた故眉村卓先生はお辞めになる前に「あなたは書けば書くほど上手くなる。これから好きなようにお書きなさい」とおっしゃいました。その言葉を胸にこれからも書き続けてまいりたいと思っております。

まほろば賞
特別賞

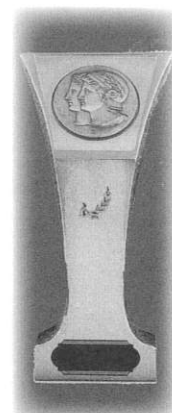
「浜辺のリズ」
（「黄色い潜水艦」75号）

藤本あずさ



藤本あずさ

ふじもと あずさ
1962 横浜生まれ
聖心女子大学外国語外国文学科卒
「黄色い潜水艦」同人
2019 「ガネーシャの娘」で新潮
新人賞最終選考
2023 春 上智大学グリーンフケア
課程入学



黄色い潜水艦
75

75



無慈悲なマリア	藤本あずさ
真の目ハレの日	島田勢津
娘の結婚	木下衣子
夏のカケラ	本手加
扶桑屋ライブ	天見三郎
娘の申のすばるたちへ	宮川美津子
お気に入りの音楽と本	御橋博典
広瀬さん 追憶	島田勢津子・七千加

YELLOW SUBMARINE

まほろば賞

河林満賞

「青山墓地の桜」

〔楨45号〕



文学グループ・楳の会

河林満賞
受賞の言葉
萩原紫香

萩原紫香



萩原紫香

はぎわら しこう

1946 東京生まれ
頌栄女子学院高等科卒
専業主婦
ブログに小説を書いていま
しがYahoo!のブログが廃
止になり、昨年より千葉県
の「檣の会」同人会所属

この度は、河林満賞を頂き大変光栄に存じます。審査員の先生方に心より御礼申し上げます。特に河林満先生の「渇水」が映画化され注目を浴びている年に受賞出来たことを感謝でいっぱいです。拝読させて頂き三十年も経つ作品とおうかがいしましたが、古さを感じさせるところか正に現代の貧困が生み出すストーリーで、リアルティに富み、重く心に残る作品だと感銘いたしました。

今回の私の作品は、どうしても書き残さなければいけないとの思いで書きました。ストーリーはフィクションですが、背景は実話です。戦後七十年以上経ち、あの当時を知っている人は年々少なくなり、私の記憶も曖昧なものになりました。ですが麻布には考えられないような環境があったことを、そして時代に翻弄されて、堕ちていくしか道がなかった彼女たちの明るさの根底にあった悲しみや虚無感を描いてみたかったです。

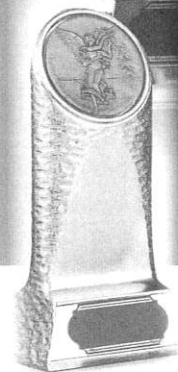
私は今までに創作を学ぶ機会もなく、自己流で書いてきました。そしてご縁があり「楨の会」に入会させて頂き、乾会長さんをはじめ皆さんに学ばせて頂いております。これからも心に残るような作品を書けるように精進していきたいと思っております。

まほろば賞

五十嵐勉賞

「血の湯」

（「繫」3号）



寺本親平



寺本親平

てらもと しんぺい

- 1943 金沢市生まれ
- 62 金沢桜丘高校卒業
- 74 文芸誌「渤海」同人
- 92 「遠州豆本の会」会員
- 2005 「卯辰」文学界上半期同人雑誌優秀作
- 同年 第33回泉鏡花記念金沢市民文学賞授賞
- 07 琵琶演奏者として「奏拳の会」を主宰 後進の指導に取り組み現在に至る
- 22 文芸誌「繫」（富山）同人

五十嵐勉賞

受賞の言葉

寺本親平

奇しくも平成二十三年に「幻燈一夜」という作品で同賞をいただいております、今回で二度目の受賞となりました。五十嵐編集長に前回の受賞作を評価されて以来、「あなたにはとんでもないものを書いてもらいたい」と励ましの言葉をいただけてきました。小生は、人間とそ生活を書くのが至って苦手で、夢想的な作品へ傾きがちでしたが、小説を書くと言う行為は精神と肉体の土方作業だと思っています。しかしそのためには徹底した集中力と技術が必要なのは自明のことです。老いて手足が不自由になってから、それを補えぬと思ってしまうえば、「万事休す」です。這いつくばっても、「ご臨終です」と言われても、死神に口述筆記をさせたく、念じております。

まほろば賞

読者賞

「見返り」

（「季刊作家」100号）

佐藤文平



佐藤文平

さとう ぶんぺい

1947 年生まれ
東京都足立区出身
「季刊作家」同人



読者賞

受賞の言葉

佐藤文平

この度は「読者賞」を頂き感謝します。また『季刊作家』が「奨励賞」と「百号賞」のダブル受賞となり、重ね重ねお礼を申し上げます。

山田洋次監督が彼の最新作を取り上げたテレビ番組の中で、『怪物』の是枝裕和監督に「近頃の映画は暗いものが多いね」とやや否定的な口調で話しかけるシーンがあって、返答に窮している是枝監督の様子が印象に残りました。その傾向は今回の「まほろば賞」の選考にも現れたように感じます。無論善し悪しの問題ではなく時代的な背景が反映された結果なのだろうと受け止めています。

今後とも「老驥（ろうき）（木偏付き）」に伏するも志は千里にあり」（曹操）の気概を忘れずに、犬猫のアシスト抜きでゴールを目指したいと思っております。



西田宣子

「白詰草」(「季刊午前」60号)

まほろば賞
優秀賞



西田宣子

にしだ のぶこ

1945 年生まれ 福岡教育大学卒業
1991 「青い魚」で福岡市市民芸術祭賞
92 「マウス・ブルーダー」で九州芸術祭・福岡県地区優秀作
94 同人誌「季刊午前」同人となる
98 「チョウチンアンコウの宿命」で『文藝界』1998 年度上半期同人雑誌優秀作
99 福岡市文学賞
2004 「楽髪」で『文藝界』2004 年度上半期同人雑誌優秀作
著書
「チョウチンアンコウの宿命」(2013 梓書院)
「おっぱい山」(2017 梓書院)
「季刊文科セレクション②」(2019 / 7 人の共著「風の海」所収)
※「白詰草」は連作
1. 「白狐」(季刊午前 59 号、主人公 35 歳、下園果林)
2. 「風の海」(季刊文科、46 歳)
3. 「白詰草」(季刊午前 60 号、75 歳)

読者賞について 読者から持ち点制の感想投票をいただき、その合計点数の最高点の作品に読者賞を贈ります。今回は投票金合計金額は 61200 円となりました。これ得票に従って配分し、各著者に贈らせていただきます。

全国同人雑誌振興会

書くことは喜びです。毎日が輝きます。
「季刊午前」の月一回の例会での仲間たちとの励まし合いが、何よりの栄養になります。その上、同人誌の仲間たちだけでなく、思いがけない所で思いがけない方たちに読んでいただけて幸福です。今後もマイペースで描き続けたいと思います。ありがとうございます。

優秀賞

受賞の言葉

西田宣子



祖父江次郎

そぶえ じろう

1951 愛知県生まれ
69 年高校卒業後
2013 年まで地方公務員として就労
92 文芸同人誌「季刊作家」同人
2013 より 文芸同人誌「季刊作家」代表、現在に至る

このたびは、幸運にも最優秀読者賞の栄えある賞をいただき誠にありがとうございます。選考委員並びに読者の方々に感謝しております。
これまで、五十余の小説作品を書いてまいりました。高邁な文学思想もなく、寂しい人生に少しでも潤いが得られればと我流で書き続けてきたにすぎません。
受賞作品「枯野」については、以前から高浜虚子の「遠山に日の当たりたる枯野かな」という俳句が念頭にあって、この風景と自身の心象風景をからませた小説を書こうと企図した作品です。
これを機に、さらに新しい作品に挑んで精進してまいりたいと考えております。

読者賞

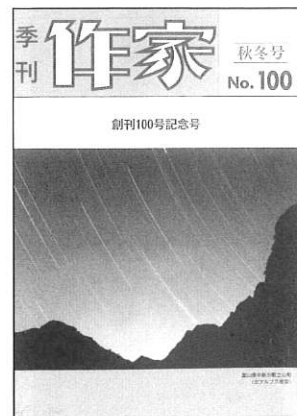
受賞の言葉

祖父江次郎

まほろば賞
読者賞

「枯野」(「季刊作家」100号)

祖父江次郎



●読者賞への御投票と賞金をお送り下さり、まことにありがとうございました。読者賞は下のよう
な結果となりましたので、ここに詳細をご報告させていただきます。

作品名 投票者	白詰草	血の湯	見返り	枯野	青山墓地 の桜	浜辺のリズ	エリザベト を選んで
木内是壽				30			
横田真紀子		20	20		20		
山田真己乃	10						10
渡辺恵理					20	10	
西田宏明			30	20		9	20
相田信子			30	30		10	
夏木宏子				20			30
外村晶子	10		20				
宮永瑛子		30		18			
渡辺 聡	10		8		30		
志村 譲		20			30	10	20
寒河江仁			10			10	18
山田まさ子	1	1	2	2		1	2
木村弥一		20					
計	31	91	120	120	100	50	100

各作品寸評

- 「白詰草」は連作なので、これだけで評価するのは無理なのでは…… (外村晶子)
- 「枯野」の文章力が素晴らしい (木内是壽)
- 「血の湯」は何か生命の根源に迫るような趣及に魅せられた。現代の日本には見られない表現は魅力。おどろおどろし世界の底に生命への深い愛がある。 (宮永瑛子)
- 「見返り」は、文章が滑らか。自然にその世界へ連れていってくれるわかりやすさがある。さりげない日常の中に人生の晩年にとんでもないことが襲ってくることを示している。誰でも起こり得ることかも。 (寒河江仁)
- 「青山墓地の桜」はよかった。米兵の愛人になる女性がとてもよく書けていて、いつまでも胸に残る。これから青山へ行ったら、この話を思い出さう。 (志村譲)
- 「浜辺のリズ」は、犬が生きていて、とてもいい。動物の心が人間にも溶け込んでくる。動物好きには、たまらない魅力。主人公の優しさが、よく伝わってくる。 (渡辺恵理)
- 「エリザベトを選んで」は、救いのない状況に、あえて救いを与えてところが、緊迫度を高めている。でも、宗教がなかったら、救われないのか。 (志村譲)

まほろば賞作品感想

今年のまほろば賞候補作は、切ないくらいテーマの作品が多かった。読者賞は「枯野」「エリザベトを選んで」のうちどちらかと思う。両作品とも書き出しから、ぐいとひきつける力量があった。

「白詰草」 西田宣子

エッセイ風の語り口の作品。たんたんとしているが洒脱であり、ことに主人公と夫とのやりとりがユーモアのセンスが感じられ、楽しい。

「元素の僕とすれ違ったとき、知らん顔して逃げるなよ」という夫の台詞は愛らしい。読者としては主人公の昔の恋人らしき、画家の峯信一郎との過去をききたいが。この小説は恋愛がメインではなく、主人公が老いて感じるさざ波のような人生観がテーマのため、恋の想い出への言及はない。

主人公の戸惑いや人生への達観は、多くの同世代女性に共感と呼ぶと思う。身近な素材から巧みに編み上げた作品。

白詰草や巨大杉がメインなので、冒頭の「草紅葉」はいらないのではないか。ここは説明的になってしまい、惜しい。

「血の湯」 寺本親平

金沢に語り部がいたのだと、わたしは独り言ちた。異形のものゝいる幻想世界が、琵琶の音にのせて語られている。想像力をもっとも掻き立てられた作品である。

浅野川にかかる橋の上を、からんからんと下駄を響かせて

歩く大柄な着物姿の男が思い浮かぶ。その後ろを異形の者たち、作中に登場する山棟蛇や蜥蜴、百足などが行列をなし、本作の言葉を使えば、「新たな血の盟を生みだし、不思議な光芒を放ちはじめ」ている。作者の琵琶楽師には常人にはみえない結果の先が見えるのではないか。

わたしがそんな想像を巡らせたのも、去年、泉鏡花の家の近く浅野川沿いを散歩したとき、「鏡花のあとに続く語り部はおらぬのか」と問いかけていたせいである。どうやらここ金沢にいたようだ。

おどろおどろしい描写が続くが、作品そのものは、天の川に浮かぶ船に水晶玉に眠る子供を連れた家族四人が乗り込み、琵琶の音に送られる所で、一枚の絵のように集約される。綺麗に収束されることをよしとするか、もうすこし不安定に終わるかを選ぶかは、好みの問題であらう。

「見返り」 佐藤文平

軽快な語り口である。松本清張を思わせる日常の中にひそむ人の悪意がテーマである。こわい、と感じたのは、わたしだけではあるまい。夫婦の秘密が死後に知られることはたまにあるので、現実的な出来事でもある。

同僚を陥れた三国は一方的な男であり、本来は墓にもっていかねばならない話を妻を失った元同僚に聞かせるのである。自分の気持ちをラクにするための告白である。自慢しなかったのかも知れない。同僚にアキた自分の女を押し付けたうえ、隠し通す良心もない。身勝手な男である。この

世に妻の過去など聞きたいものがあるだろうが。

聞かされた主人公は何も言い返せず、まことに情けない。読者としては腹立たしいが、同時にこうも感じた。騙した相手の気持ちにもほだされるような、この善意の人の情けなさ、作品に淡いペーソスを感じさせている、と。

余談だがわたしの父も、三国のようなことをやったのである。主人公に代わって殴ってやりたい。

作品の展開は演劇的であり、土下座のシーンも活気がある。小さな小屋の二人芝居で演じても似合いそう。

「青山墓地の桜」 萩原紫香

戦後の麻布を舞台に、米兵の愛人女性になっていた少女が主人公である。クッキーもくれるやさしいお姉さんについて意地悪をしよう、少女らしい感覚が繊細に書かれている。素晴らしいと思ったのは、吊るしたネクタイが「地面すれすれに垂れて」という表現である。このすれすれという形容詞が、このお姉さんが人生をすれすれに生きてきたとも取れるし、もう少し何か助けがあれば生きていかれたのかもしれないと思う主人公の少女の悔恨とも重なる。

甘やかでデリケートな語り口がこの作者の持ち味である。一九四六年生まれということで、この時代の少女ではなく、前の世代への果敢な挑戦と透明感のある色を応援したい。

「浜辺のリズ」 藤本あずさ

犬の反応を表すところに面白い表現が目についた。ハッピーが戻ってきて吠える場面。「私がオーケー出してやった

聖書の引用は少し多いかもしれない。ここも好みの別れるところであろう。

「枯野」 祖父江次郎

この作品もまた数行読んで、入賞と思わせた。文学性の高い作品である。ああ、だけど、祖父江さん、こんなにも民生委員を目的にしないで。元民生委員としては、作中の民生委員のタイプがいけないこともないが少数なので、忸怩たる思いにとらわれた。

枯野どころか、おおいに人生に未練のある主人公である。妻亡きあと、運動もかねてスーパーのベンチに座っている。わたしは常々、スーパーで座っている老け切っていない男たちが、時折ちらりとわたしの買った物袋を羨ましそうに見やると、不思議に思っていた。葱や大根ののぞいた袋である。その視線の意味をこの作品は教えてくれた。

表現では「イチヨウ畑がまるで骨だけになった老人たちの群れのように」という所が、ユーモアがある。その直後の太陽光のパネルも現代的な描写である。

尿意は少し多いかもしれない。

青森からきた出稼ぎの利那主義について描いた部分で「付けで飲むのも珍しくなかった」とある。まるでツケで飲むのが悪いことのように。ツケは庶民はあたり前、昔は普通の人は酒でも醤油でもツケでしょうが、と言いつ返しなくなった。しかしそんな細かい不満は吹き飛ばすほどの高次元の作品である。

んだから」というふうに犬が話しかけたとある。

主人公は、犬が好きで、ALSの患者さんの犬をボランティアで世話している。「気位の高い犬」は、主人公と飼い主の会話の意味を理解している。主人公の飼いだりズもまた人間の会話を解する。主人公がご主人の悪口など言うと、吠えるのである。

だが、問題発言もある夫についてはそれ以上の掘り下げはなく、主人公も結局聞き流す。難病という重い素材である。わたしがこの作品で気に入っているのは、犬も人間もいきものとして同等に扱われている点である。絵の中の裾の濡れたマリアを眺めて、愛犬の出自を思い浮かべる。心やさしい書き手である。作品全体は明るく、作風にも好感が持てる。

「エリザベトを選んで」 蒔田あお

最初の数行でこれは入賞するだろうと思った。小説らしい作りである。自殺した母と弟、過去を抱えた主人公はダメ男の陽平を好きになる。「人間らしい感情」を宿らせてくれた陽平もまた家出した母親のため両親の愛情を受けずに育った。ともに機能不全家族に育ち、典型的な依存と逆依存の関係性が描かれる。いきいきとした大阪弁が、リアリティをもたらし、した。

主人公は末期癌となり、赤ちゃんを抱えて切迫したとき、夫は頼りにならない。子供を児童施設に預けなければならぬ。この境涯を支えているのは、昔から面倒を見てくれてアトバイスをくれていた。先生や牧師、聖書である。

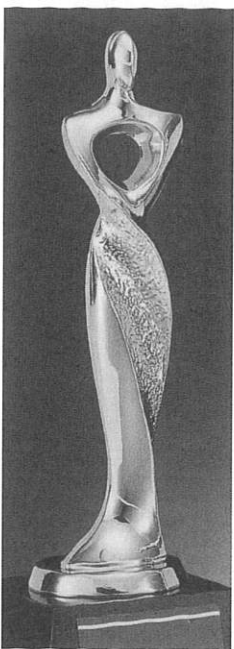
河林満賞の移設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品はこれまで銀華文学賞に応募される小説作品を対象にしましたが、銀華文学賞の一時中断以後まほろば賞のなかに移されることになりました。同人雑誌の優秀な作品に贈賞され、受賞者には賞状、記念品、賞金十万円が授与されます。(二〇二二年改訂)

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮



白詰草

シロツメクサ

西田宣子

風が冷たい。晩秋の冷えた空気が木も草も土も眠らせようと準備を始めている。久しぶりに花牟礼川^{はなむれがわ}の河川敷に来た。十一月になって辺りはすっかり寂しくなった。酷暑を耐え抜いた草たちも葉を落とし、枯らして一年の営みを終えようとしている。春の芽吹きから冬の命の終わりまでを思い出しながら土の下に隠れる日を待っている。

紅葉を始めた草たちを見て、

「草紅葉^{くさもみぢ}というそうよ」

喫茶「夢」の店主の須美さんが言ったことがある。

「命を終えるときの最後の華やぎね」

人間もそうありたいけど、さてね。そう自嘲的に言う。

私たちはこういう会話をする年齢になった。

彼女との交際は長い。もう四十年近くになる。出会った

の結果、何を見つめるのだろうか。

河川敷に座り込んでシロツメクサをスケッチする。シロツメクサは地を這うように繁茂する。濃い緑色の葉を茂らせ、白い球状の花を咲かせる。春四月から寒さの厳しい十二月まで、その強い生命力を発揮する。マメ科なのでその根に栄養を蓄え、母なる大地を豊かにする。

昔、信一郎にこう質問された。なぜ、バラや百合を描かないのかと。あのときの質問に、今でも正確に答える自信がない。なぜ、地味な草や地味な萩の花に心が動くのか。

そして今、新しい疑問を抱えている。私はどうして美しい風景画に心が動かないのか。

シロツメクサの葉の中央に、V字形に入る白い模様を鉛筆で薄く入れながら、自分の心の傾き方にふと苦笑してしまふ。一流の画家の美しい風景画を見ても、そこに人間の営みの影のようなものが想像できないと、浅い感動しか持てないのは、私の困った性癖だと自覚している。

ずっと昔、院展だったか日展だったか一人で美術館に見に行ったことがあった。有名画家たちの美しい大作がいくつも並び、たくさん鑑賞者たちの視線を集めていた。片隅に、他の作品群から見れば、とても地味な作品があった。十号ぐらいだっただろうか。古くてくたびれたトラックが一台、でこぼこの雪道をこちらに向かって難渋しながら走ってくる。花もなければ、月や星もない。人影もない。

ころ三十代だった私は七十五歳になり、須美さんも八十歳になった。彼女は元氣だ。五十代で重一さんというパートナーを得て、今でも「夢」を現役で切り盛りしている。私の娘の千夜^{ちや}が働かせてもらっているが、須美さんの淹れるコーヒーの味にはまだまだ追いつかないとため息をもらす。十月末日が締め切りだった県展には今年も何とか搬入が終わり、ようやく一息ついたところだ。県展には三十五歳のときに「白狐」という五十号の作品を始めて出品し、佳作という高評価をもらった。以来、毎年出品を続けている。評価は良いときもあれば落胆するときもある。「描きたいなら描け。才能のあるなしなんて関係ない」。四十年前に峯信一郎に励まされ続けてきたこの道。終わりのない苦しい道。私は死ぬまでこんなことを続けていくのだろうか。そ

ただ汚れた雪道と、ぼろぼろの一台のトラックだけ。その前で私は動けなくなった。トラックが一人の人間に見えてきたのだ。人生のいくつもの試練を受けて、ときには立ち往生しながらそれでも諦めずに走り続けようとする人間の姿。胸がいっぱいになり、そこに長時間いたのだと思う。ふと後ろに人の気配を感じた。振り向くと、六十代ぐらいだろうか、男の人がじつとこの絵を見ていた。

「さすがだな、高山辰雄」

その人はちらりと私を見て、微かな笑みを浮かべると静かに立ち去っていった。私に似た困った性癖の人がもう一人いたと嬉しくなった。

この年齢になると、いろいろと思い出すことが多い。そのたびに手が止まる。思い直して、また手を動かす。当然ながら作業は進まない。それに年齢に相応して体力は落ちている。物忘れもたびたびのことだ。その上、心の動き方も進む方向に行くのではなく、来し方を振り返ってつい後ろ向きになる。そして、ああ、困ったもんだと一人でため息をつく。

こんな私の困った癖に、夫の雄二はとつくの昔に気付いていて皮肉を言う。

「果林のその悪い癖、またひどくなったな。年は取りたくないもんだな」

今朝も、玄関先でランニング・シューズの紐を結び直し

ながら、ちらりと私を見た。七十八歳の彼は元気だ。七十歳で退職した後、ジムに通い、テニス教室に通い、毎朝のランニングも欠かさない。

「須美さんに会ってきたらどうだ。僕は午後はジムだから、その帰りに迎えに行つてやるよ」

じゃ。彼は軽い足取りで出掛けて行つた。

さて。河川敷での進まないスケッチを止めて、「夢」に帰ることにした。立ち上がつて向こう岸を見た。川岸の桜並木は黒い枝だけの寂しい眺めとなつてゐる。また冷たい風が吹き渡つてきた。夫はもう先に行つて、須美さんの美味いコーヒーを飲んでいるころかもしれない。

「夢」のドアを開ける。すぐに須美さんと目が合った。彼女がにこやかな視線を店の奥にやつて私に合図する。見ると、白髪頭の男性が二人、何やら話し込んでゐる。そのうちの一人は夫だ。ブルーのシャツに広い背中は見間違わない。もう一人が私に気付いて、こちらに來いと合図する。

重一さんだ。須美さんのパートナー。そうか、帰つてきたのか。道理で須美さんの顔がほころんでいるはずだ。男二人の話の中に入つていいものかどうか。迷つてゐると、須美さんがトレーにカップを乗せ、ポットも持つてきた。

「何やら、よからぬ話をしていないか偵察してきて」

須美さんにトートバッグを預けると、二人の席に行つた。

私から見れば、重一さんは凄い人だ。その彼が自然は凄いと云つてゐる。足元が頼りなくなつてきた。彼は以前はスケッチ旅行に行き、二、三か月留守をするのは、当たり前のことだった。三十年前、この地にぶらりと立ち寄り、

津本湾を描くために空き家になつてゐた須美さんの実家を借りたのが二人が知り合うきっかけだった。二人は当然のようにその家で同居を始めた。あれから長い時間が流れた。重一さんはさすがに七十代に入つたところから家を空ける回数減り期間も短くなつたが、思ひつければ今でも月のうち一週間ほどは旅の空だ。須美さんもそれが当然のことのよう受け入れてゐる。私たち夫婦とは考え方も時間の使い方とも違う。そして本当に凄いの、重一さんの気力と体力。どこからエネルギーが湧いてくるのかと驚く。ここがプロとアマの違いか。同じ年の私など、体力の衰えを感じて、外出するのが億劫になることが多いのに。

そう言つて重一さんは笑つて答える。

「僕も今のうちだよ。いつまで一人で山や森の中に入つていけるか自信がない。雄二さんの筋肉ばりばりが羨ましい」

「いやいや。僕のは単なる老化防止。この人が冷たいから、ほけると家から追い出されそうだから」

「へーっ、果林さんって、そうなんだ」

重一さんまで夫に合わせて私をからかう。

「年を取るとね、夫婦はいつの間にか形勢逆転。いつも隅

「いつ帰つてきたの？」

夫の横の椅子に座り、二人のカップにコーヒーを注いだ。「ほんの一時前だつて。今、旅の話聞いていたところだ」

夫がおいしそうにコーヒーを啜る。重一さんは無精髭を生やして、でも日に焼けて元気そうだ。髭のなかの白いものが天井からの照明できらりと光つた。

「屋久島でたくさんさんの木に会つてきたよ。圧倒されて帰つてきた。やつぱり自然は凄いよ」

彼は天井を見上げてふーっと大きく息を吐いた。そしてぼつりと言つた。

「縄文杉を描くことは無理だ。少なくとも僕力量ではね。残念だが」

彼の言葉は続いた。縄文杉は樹であつて、ただの樹ではない。何を描いたら、描いたことになるのか、想像もつかない。何千年も生きてきて、今も生き続けている樹をいかに大きな画面を使つても、その中に閉じ込めることは不可能だ。樹はそのまま樹としてほうつておくしかない。それを知つただけでも縄文杉に会えてよかった。彼はもう一度大きく息を吐いた。

彼の話聞きながら、そうか、自然はそんなに凄いのかと思つた。ちまちまと草や花を描いてきた自分の今までが急にしぼんでつまらないものと思えてきた。

で小さくなつてゐるよ」

私は思わず夫を睨んだ。私が冷たいつて？ 私が絵を描くことを快く思わないで、長年、嫌みばかり言つてきたのは、どこの誰かしら。私の反応を見て重一さんがやりと笑つた。私たち夫婦の長年のあれこれを彼は須美さんから聞いて詳しく知つてゐる。

重一さんは全国的にかなり有名な画家だ。須美さんと知り合つた四十代半ばのころは、海の絵ばかりを描いていた。それがいつのころからか山や樹など自然を対象とした絵を描くようになった。私も若いころから絵を描いてきて、いまでも細々と続けている。彼との交際は須美さんを間にして長い、二人で絵の話をするのは少ない。彼は油絵、私は日本画という方法の違いもあるが、なぜだか二人とも絵の話をする雰囲気がある。絵は二人にとって聖域だから、そこに雑音を入れたくないという思いもあるのか。もちろん重一さんは私から見れば雲の上の人だ。私の方に遠慮があるのも事実だ。

「分からんなあ。彼からアドバイスをもらえばいいじゃないか。折角、身近にいるんだから」

夫はいつも頭をひねる。でも、そういう問題ではない。

そう簡単でもない。私が黙つてゐると、夫はさらに続ける。

「まあ、あんたのへそ曲がり、若いころからの筋金入りだからな」

そうなのだ。よく自覚しているが、私の気持ちは、まっすぐ前に動かない。ちらりと視線が横に逸れる。だから若いころはバラや百合などの華麗な花を描かず田の畔や道端や河川敷などの地味な花ばかりを描いてきた。へそ曲がりの人生をもう七十五年も続けてきたことになる。

こういう重一さんと私の付き合い方を須美さんにはこりと笑って黙って見ている。まあ、絵描きなんて世間の常識の外で生きている人種だから、それを貫くしかないのよ。そして気が向いたら常識の世界にぶらりと戻ってきてくれたら、それで十分。

私のことはともかく、彼女は重一さんのことをそう考えているようだ。私は日ごろはどっぷりと世間の常識の中で暮らして、時々、外の世界に逃げだしていくけれど。

重一さんの旅の話を聞いて一段落してから夫が腰を上げた。

「車で送るよ。津本北町の自宅まで。今日は疲れているだろうから」

「ありがとう。でも今夜は店の二階に泊ります」

自宅のほかにも、店の二階にこじんまりと生活する空間がある。ちょうどそこに須美さんが来た。

「そうよ。人生、そんなに甘くない。重一さん、今から千夜ちゃんと店番よ。私は食材の買い出しに行くから」

見ると、いつの間に来たのか、カウンターのなかから千夜

でもなく図太くなっていると自分でも苦く思う。夫はにやりと笑った。それを無視して、それにね、と言葉を続ける。「重一さん、無責任ではないわ。ほら、ずっと前。彼のお母さんを看取りにいつて、ちゃんと息子の責任を果たしてきた」

あのときは須美さんも何か月も店を閉めて、四十九日の法要まで済ませて、二人で津本に帰ってきたのだった。

駐車場に置いていた車に乗ってからも、須美さんに聞いた話を夫にした。重一さんは須美さんのお骨を拾うつもりらしい。彼は須美さんより五歳若い。だから心配するな、とよく言うらしい。ふーん、意外だな。そんな表情をしたあと、夫が言った。

「僕の最後は、あんたに頼むよ。長年、付き合ってきたよしみだ」

「よしみて？」

わざととぼけてみた。

「よしみは、よしみだよ」

夫は急に車のスピードを上げた。夫七十八歳、私七十五歳。長い長い付き合いが続けてきた。その間にいろいろなことがあった。そして、こういう話をする年齢になった。

翌日。

早々と昼食を済ませると、夫はジムに出掛けて行った。

がにこりと笑顔を送ってくる。須美さんは「夢」を千夜に譲るつもりだ。千夜の夫の山口武さんは五十代の働き盛りの会社員。孫の正純と可奈は二人とも社会人になり、五十代に入った千夜は、もう十年以上もここで働かせてもらっている。

苦笑する重一さんと千夜を残して私たちは店を出た。夫がぼつりと言った。

「羨ましいな、重一さんみたいな生き方」

「どこが？」

「だって自由だろ。気ままだろ。何の責任もないし」

「あなたには、似合わないわよ」

「そうかな」

「自由は苦手でしょ。あなたは自分でルールを敷いて、その上を全力で走るのが好き」

「そうだな。分かってくれてるじゃないか」

「彼は気ままに見えて、気ままじゃない。気ままはタガがないってこと。タガが外れればどこまでも落ちていく。私なんか恐ろしくて、とても無理」

「そうかなあ。あんた、結構気ままに暢気に生きてきた口じゃあないのか」

私は思い切り、夫の靴を踏みつけた。夫が悲鳴を上げる。

「分かってないのね、私の長年の苦勞」

こんな強氣、やはり年を取ったことの証明なのか。とん

車を玄関先で見送りながら、ふと夫が言った言葉を思い出した。彼はよしみだから、と言った。よしみ。何かの縁でつながりができ、仲間とか連れ合いとか運命共同体であるという意識が働く関係ということだろう。

同じ会社で働いていて、ほんとにひよんなことから互いに心が動き、私たちは結婚した。五十年以上も共に暮らしてみれば、確かに仲間意識は育っている。が、それ以上の強い感情を持てずに、うかうかと過ごしてきた。夫によしみなどという言葉を使わってしまった自分を不甲斐ないと思う。もっと強い、もっと深い関係を築けたはずなのに。私は自分の情の無さが恥ずかしい。私たち夫婦は、というより私はどこかで大切なものを失くしてしまっている。絵のことばかりを考え、半分の心で夫を見てきた。どうすれば、いいのか。今から修復可能か。気が重い。それでも絵は手放さない。五十年は長かった。凝った肩をたたきながら、家の中に入った。

今から午後四時までの三時間余りが、私が集中して絵を描ける時間だ。それと深夜。一階の電話留守電にして、すぐに二階の自分の部屋に入った。来年三月のグループ展に出品する作品に取り掛かったばかりだ。毎年十月末日締め切りの県展と三月のグループ展に参加すること。これが長年の描くことのスケジュールになっている。

壁に五十号の画板を立て掛ける。そして木炭で大体の構図を決めていく。若いころは描き始めから完成まで、画板を床の上に置いて座り込んで描いてきた。長年の座業の結果、膝を痛めて正座ができなくなった。今は輪郭線を描くときや仕上げの細かい筆の動きが必要なときは画板を床に置き、私も座り込むが、それ以外は立ったり椅子に座って描くことが多くなった。特に構図を考えるときは、壁に立てかけて距離を置いて全体を眺める方が効果的だ。座業で膝を痛めること。ここにも老化が災いする。

珍しくタイトルは決めている。「白花」だ。花は女。地に咲く花。女の年代記を描くつもり。

木炭でざっと全体の構図を決める。描いては眺め、描き足す。消す。また描く。そのたびにぼんやりと像が浮かび上がってくる。

まず正面に大きく描くのは若い女性像。十代。晴れやかな表情ではない。これから自分が歩み入ろうとする世界への不安と怯え。道の先に何が待っているのか。落ち着かない。私自身の十代のころ。娘の千夜の姿。そして孫の可奈のほんの四五年前の表情。十代は不安の時代だ。体が変わっていく。それに心が追いついていかない。同じクラスの子は笑っているのに、私は大きな声で笑えなかった。中学を卒業して高校を卒業して大学に入って、それから……。果てしなく時間が続いている気がした。その先は？

これは七十五歳になった私の自画像のつもり。やれやれという安堵感。長く生きてきて、ようやくここにたどり着いた。台地に静かに横たわる私。長い道のりだった。安楽。平穩。もう頑張らなくてもいいという安心感。小さい像だが、弛緩した寝姿から、安堵感が表現できるだろうか。還っていく日も近い。ようやく手に入れた苦い微笑み。これで良かったのかという後悔に満ちている。

画面全体に広がるシロツメクサの群落を見て、また雑草を描いたのかという厳しい批評の声が聞こえてくる。でもやはり私が描きたいのは、野の草たち。世間にバラや百合や牡丹のように派手な存在感を示す人たちもいる。だが野の草のように地味で、声高に自分を主張することは少ないが、しかし自分の足元を固め、大切な者たちを守り、着実に人生のときを過ごす草のような女たちの姿を私は描きたい。世界はそういう女たちが支えている。野の草は強い。なかでもシロツメクサは母なる大地に栄養を与える。女たちを支える。

こんな思いをこの作品に込めようと思っている。完成した絵を見て共感してくれる人はいるだろうか。

十二月も半ばになって、冷たい風が吹く日が多くなった。寒い季節は昔から嫌いだ。植物は命の営みを休止して、地上は寂しくなる。私も寂しくなる。春はあんなに心がふわ

無事に大人になったとして、そのとき私は何をしたらいいのだろう。第一、ちゃんとした大人になっているだろうか。ちゃんとした大人って、どういう人のこと？ いつもいつも不安だった。

左の中ほどには四十代半ばの女の人。こちらを見据えている。彼女の顔にも微笑みはない。自覚と責任の真つただ中で、少し疲れている。が、きりりと結んだ口元には決意の表情が見える。

二人がいる地面にはシロツメクサが白い花を咲かせている。濃い緑色の地平がどこまでも続き、それが果てる地平線の上には仄かな明るみを見せる薄暗い空が広がっている。大学を出て就職した。社会と繋がり、宙ぶらりんだ足がようやく地に着いた。進むべき道が決まった安堵感。さらに二十代半ばで結婚した。さらに落ち着いた。手に入れた自分の世界を守り、育てようとする決意。喜びも大きかったが、苦勞も多い。夫を得て子どもを得て、その分、世界は広がったが、摩擦も多い。子どもを育てながら自分も成長しようとするときの半端ではない努力。仕事と子育てを両立する人は多いが、私は仕事を手放した。そして絵を描き始めた。両親や友人は応援してくれるが、家庭との両立は苦勞の連続だ。でも大切な者たちや事を両方とも手放すつもりはない。その決意を込めた眼差し。

そして地平の果てる辺りに、年老いた女の寝姿がある。

ふわして落ち着かなくて、でも嬉しいのに。悪いことはきつと寒い日に起きる。そんな私の予感が当たった。

夕方、重一さんから連絡があった。

「須美が倒れたんですよ。いま、市立病院。すぐ来てくれますか」

ジムから帰ったばかりの夫と二人で病院に駆け付けた。須美さんは三階にある四人部屋の窓際のベッドで眠っていた。その日は水曜日で「夢」は定休日。遅い昼食を午後二時ごろにとり、二人でテレビを見ていたときに急に須美さんの気分が悪くなり、すぐに意識不明になったので救急車を呼んだという。以前から、たびたび胸痛があると言っていたらしい。

重一さんは慌てていた。私たちが病室に着いたときも、ベッドの横の丸椅子に座ったり、かと思えば、すぐに立って窓の外を落ち着かなく見ていたりする。

一時的に下がっていた血圧も戻って、今は薬で眠っている状態だという。詳しい検査は明日からで、今日は安静を保つて様子を見るという。私はすぐに重一さんから入院に必要な物品のリスト表をもらおうと売店に行った。洗面道具やタオル類やティッシュなど、当座入院に必要なものを買って病室に戻った。何日間の入院になるのか分からないが、下着類は重一さんに持ってきてもらおうしかない。

「働き過ぎかもしれない。八十歳になったんだから千夜

ちゃんと交替したらと言っていた矢先なのに」

ようやく落ち着いた重一さんが、珍しくぼつりと愚痴を言った。そしてほっと息を吐いた。それで重一さんの緊張も少しほぐれて、私たちもほっとした。二人で病気になるのは、こちらが敵わない。

「そうだね。これが良いきっかけになればね」

夫がそう言ったとき、千夜が病室に入ってきた。ページュのコートを手持ってまっすぐにベッドに近づき須美さんの顔を見ると、重一さんに頭を下げた。昨日はあんなに元気だったのに、と私たちを見てぼつりと言った。そして重一さんと二人で廊下に出て行った。明日からのことを相談するのだろう。

須美さんは軽い寝息をたてて眠っている。その顔をしみじみと見た。長いつきあいなのに、こんなに近くで見入るのは初めてだ。

面長の顔をショートにした白髪が取り囲んでいる。眉にも白いものが混じり、形の良い鼻からすぐに肉厚の唇に続き、まなじりには浅い皺が何本も走っている。それは彼女が柔和に笑ったときの何とも言えない魅力を作り出すものだ。

この人にいつも励ましてもらってきたなあと思わず頬を撫でた。温かくて柔らかい頬だ。と、白衣の男性医師と、そのあとから須美さんの従弟の洋二さんと重一さん、千夜

も入ってきた。

「詳しいことは明日からの検査が終わってから説明します。血圧が低めで胸痛もあるようだから、心臓の機能から調べます。いずれにしても重篤な状態ではないので、深刻になる必要はありません」

その言葉を聞いて、みな一安心した。

面会時間は午後二時から。店は重一さんと千夜が頑張る。私はなるべく須美さんに付き添うことにした。洋二さんもたびたび顔を出すという。それだけを話し合って午後八時ごろ病院を後にした。重一さんはもう少し残って、今夜は店に泊るという。洋二さんと千夜とは病院の駐車場で別れた。別れるとき、千夜に声を掛けた。

「武さんは相変わらず忙しいの？」

「うん。亭主は元気で外がいいわ」

ぺろりと舌を出すと、急いで車に乗り込んだ。車の中で夫があきれ顔で言う。

「どんどんあんたに似てくるな」

「そりゃあ、私の娘だもの」

夫はそれきり無言になった。

翌日。新しく買ったバジヤマ二枚と下着類、私の小分けした化粧水を入れた瓶を持って、病院に来た。夫はジムに行くというので、今日は私ひとり。面会時間の午後二時を

たった五分過ぎたばかりだというのに、重一さんはもう来ていた。須美さんはいつもの落ち着きを取り戻して、二人で小声で話している。点滴の管が右手に付けられているが、顔色も昨日よりずっと良くなっていて、何より私に氣付いて笑いかけてくる顔がいつもの須美さんのもので安心した。心配かけたね、と言う須美さんにうん、うんと頷くと、重一さんを見た。

「もう来てたんですか。私の方が早いと思ったのに」

ふざけて言う私に、重一さんが慌てて椅子から立ち上がった。須美さんが追い打ちをかける。

「いざとなったら、男の方が度胸がないのよ」

いつもの舌鋒の鋭さが戻っている。さらに安心した。心配かけといて、それはないでしょう。そう言いたげな顔でちらりと須美さんを見ると、重一さんは売店に行つてくると言いおいて病室を出て行った。

「いじめないでね、私の大切な連れ合いを」

須美さんが言うので、私は呆れた。どちらがはじめたのやら。持ってきた着替えを棚に入れながら、タオル類がもう少しあったほうが良いなと思う。十年ほど前に最初は父、ほどなく母の看取りを経験しているので、こういう段取りには自信がある。午前中、何か検査があったかと聞く。どうも血圧が不安定らしい。多分、心臓が腎臓に少し異常があるかもしれないという。

「まあ、長年の疲れが出たのよ。年も年だしね」

ゆっくりと話す須美さんの声を聞いて、少しずつ安心してくる。

「でも、重一さんがいてくれて良かったね」

彼女は嬉しそうにうんうんと頷いた。そして、あの人は私の大切な重しだからねと言った。そう言ったきり黙り込んだ。私も黙って椅子に座り、彼女の手を握った。そして彼女から何度も聞いた三十年以上も前の話を思い出した。

須美さんは二十代の終わりのころ、勤めていた会社で沢辺三郎という男と知り合い、勢いで同居するようになった。両親も会社の上司も、評判の良くない沢辺との関係を否定したが、それに反発して自堕落な沢辺との生活が続けた。ある日、沢辺は出て行った。「あんたも、大した人間じゃなかったな」と捨て台詞を残して。傷ついた須美さんは会社を辞め、叔母の大島波子さんの知り合いが経営する喫茶「夢」で働くようになった。自分は真面目な人間なのに、なぜ男運が悪いのだろうと嘆きながら暮らしていた。そんな彼女の事情は知らないまま、私は彼女と知り合いになった。

彼女が五十代に入ったころ、画家の重一さんが空いていた彼女の実家を借りることになり、二人の付き合いが始まった。重一さんも辛い過去を抱えていた。自分は大した

人間ではないのに、とんでもない思い上がりから妻を亡くした。そう話した後、須美さんの傲慢さを指摘した。自分が男運が悪いと嘆いている間に、三郎さんの残した言葉の意味を考えたらどうか、と。人間関係の間で、片方だけが一方的に悪いなんていう理屈は通らない。三郎さんも女運が悪かったと嘆いたのではないか。自分は太したことのない人間なんだと自覚しない限り、その傲慢さからは抜け出せない。そう言う重一さんの言葉が須美さんを突き刺した。須美さんと重一さん。二人は似たような経験をして、それが二人を結び付けた。

須美さんはいつも言う。自分の本当の姿を見定めるのは難しい。それを邪魔するのは、傲慢と偏見。自分は大したことがない人間だという自覚がないと、とんだ考え違いをする。でも少しは大したことある人間かもしれないという小さな希望もある。それは沢辺も同じだった。沢辺も大したことがない人間だったが、大したことがあるようにと願っていた存在だったと重一が教えてくれた。

とんでもない思い上がりで飛んでいきそうな私を、人としての本当の立ち位置に引き戻してくれるのが重一。あの人と一緒に謙虚で飾り気のない裸の私でいられる。だから重一は、私の重し。大切な重し。こんなことが分かるのに、五十年もかかってしまった。私って本当にバカ。重一に会わなかったら、バカのまま生きて、バカのまま死んで

いくことになったのかもしれない。

良かったね、須美さん。重一さんに会えて本当に良かった。そう言おうとして須美さんの顔を見ると、彼女はいつもの間にか軽い寝息を立てて眠っている。間もなく重一さんが戻ってきた。

午前中の心臓のエコーと肺の撮影に続いて、午後三時から次の検査が始まるという。私が付き添うことにして、重一さんは一度店に戻ることになった。六時ごろにまた来るという。

「千夜ちゃんにしがかれていますよ。彼女の捌けぶり、誰に似たんだか」

そうにこりと笑って言うと、須美さんの顔を覗き込んでから帰っていった。

千夜はどんくさいと言われ続けてきた私には似ていない。現役のころ、ばりばりと仕事をこなしていた父親の血を引いている。どんくさいのは、私だけで十分だ。ふと峯信一郎のことを思い出した。彼は今頃、どうしているだろうか。元気であるだろうか。

午後三時からの検査は心臓の血管の撮影だという。検査の三十分前に看護師が錠剤を飲ませ右腕に注射をした。心臓の動きを遅くして、正確な写真を撮るためだという。話

を聞いて驚いた。心臓の動きを思うように操作できるなんて、現代医学は凄い。こんなことに耐えられるなんて人間の体も凄い。しばらくして須美さんは看護師と一緒に二階の検査室に行った。私は病室で待っていることになった。

ぼんやりと窓の外を見る。そして考える。須美さんは重一さんが自分の重しだと言った。彼といえば、謙虚で飾り気なく裸のままで見られる。死ぬまで、自分の立ち位置を外さないで生きていけると。では私にとっての重しは、一体なんだろうか。夫だろうか。少しちがう気がする。夫の前で私は裸でいられない。隠し、虚勢を張り、時には嘘をつく。反発もする。悪いとは思いますが、それは自分を守り娘を守るためだと思っているが、本当にそうだったか。だから夫によしみなどという言葉を使わせてしまったのか。

仮に峯信一郎と結婚していたら、どんな人生だったか。しかし彼も私の重しではない気がする。彼も私の夫の立場になつていたら、雄二とあまり変わらない言動をするのではないか。人は人との関係の中で、また立場から考えて、相手との距離をとろうとする。まず守るのは、自分自身だから。夫という立場は妻には恐ろしい。強敵だ。こう構えてしまふから、夫によしみなどと言わせてしまふのか。

もしかしたら、私の重しは絵を描くことではないか。描きながら観察し、描きながら考え、描きながら迷って、それでも描き続けてきた。七十五歳になって、続けてきたこ

とで名声を得た訳でもなく、たくさんのお金を得た訳でもない。だが、描いていれば絵の前で謙虚でいられる。誠実でいられる。何かを描き、それを不特定多数の誰かに届け、誰かと共感しようとする。いつも考えながら描いてきたことが私の重し。私の立ち位置だと気が付く。何が重しになるかは、人それぞれで、それを見つめるために生きているのではないか。絵を続けてきてよかったと思うが、その代わりに何か大切なものを手から滑り落としてしまったのかもしれない。人生は苦い。

三十分ほどして須美さんが帰ってきた。

「診察台に寝たまま、トンネルに入ってきた。凄い音がして驚いたけど、撮影はあつという間に終わったよ」

短い言葉で区切りながら、ゆっくりと話す。彼女は冷静だ。結果は重一さんと二人で聞くという。

「ほんとは少し緊張してたのよ。入院なんて、初体験だから」

私も話を聞くだけで恐ろしい。

「波子叔母が入院してたときのことを思い出した。あのとき、叔母は私とほぼ同年齢だった。心配しないで。たぶん大丈夫だからって気軽に言ったもんだけど」

言いながらベッドに横になる。

「疲れたでしょ。少し眠ったほうがいいよ」

そうね、と言って彼女は目を閉じた。彼女の叔母さんが

入院したのも同じ病院だった。もう三十年近くも前の話だ。それから叔母さんは十年以上も生きた。そこまで考えて、はっとした。いつか須美さんが目の前から消えるときがくるのだろうか。考えてみれば彼女は八十歳で、私は七十五歳だ。どちらが先に逝くか、分かったものではない。寂しくなった。悲しくなって、眠る須美さんの顔をじっと見続けた。

しばらくしてナースステーションに声を掛けて帰ることにした。帰りに「夢」に寄る。検査が無事に終わったことを重一さんに伝えた。ばりばりと仕事をこなす千夜が私にコーヒーを淹れてくれた。私が一口飲むと、反応を窺っている。

「まあ、合格。でも須美さんの味にはまだまだだね」

がっかりする娘に須美さんの伝言を伝える。

「千夜がいるから安心だつて」

うん、とすぐ笑顔になってカウンターの中间に戻っている。静かなBGMが流れて、コーヒーの良い香りが漂って、時々、客の談笑の音が漏れてきて雰囲気は前と同じなのに何か足りない。そうか、須美さんがいないからか。分かっているのに、また寂しくなった。

翌日もその翌日も須美さんの所に行った。絵を描く気分には、とてもなれない。行ったからといって、別段の要件

のいいのか。それとも自分と同じ場所でもいいのか。静かに眠れる場所を二人で話し合って決めるという。

「果林たちは、どうするの？」

うん、と考え込んだ。夫は次男なので実家の墓には入れない。私は一人娘なので、両親のいる納骨堂に入るのだろうか。それとも自分たち夫婦だけの納骨堂を同じ寺に求めるのだろうか。二人とも黙り込んでしまった。こんなことを話す年齢になったのかと、それぞれにため息をついた。そして、道の果てが見えて少し安心した。

その日の夕方。夫と二人で夕食を取りながら須美さんの話をした。ついでに自分たちの死後のことも。夫がぼつりと言った。

「同じ寺の、別の納骨堂がいいな」

「えっ。別？ あの狭い空間に何人入れるのかな？」

「いや。絶対、別が良い。僕、お義父さんに嫌われていたからな。死んでまで気を使いたくないよ」

私は思わず笑い出した。何も分からなくなっている死後に、気を遣うのも何もないだろう。でも大切なことの一つに答えが出て肩の力が抜けた。

二日後に須美さんが退院して津本北町の自宅に戻り、重一さんも須美さんと一緒にいる時間が多くなった。寒い季節だし、年内は店に出ないで静養したいという。

があるわけではない。洗濯物を受け取って、洗ってきたものを元の棚にしまうだけ。あとは彼女の顔を見て私が安心するだけ。これではどちらが病人なんだかと二人で笑っている。

須美さんの心臓の冠動脈に詰まりはなかった。だが二か所、石灰化が始まっている箇所があるという。胸痛の原因はストレスなどの何かの刺激で心臓のどこかの小さな血管が痙攣をおこしているようだ。腎臓が少し弱っているが、肺には異常なし。

「八十年分の疲れが、体のあちこちに溜まっているということ。年齢相応であることをもつと自覚しろということね」

須美さんは笑っている。あと二三日で退院。定期的な通院が必要らしい。

「ありがとう、果林。すっかりお世話をかけたわね」

須美さんがすまなさそうに言う。

「いいえ、ちつとも。でも驚いた。須美さんが病気になるなんて。私の心臓が止まるかと思った」

「迂闊の極みね。そりゃあ私だって病気にぐらになるわよ」笑った後で、もう一つ迂闊なことがあると須美さんが言う。この年齢まで自分たちの納骨のことを話し合ったことがないという。縁起でもない。病院でする話ではないと思っただが、彼女は小声で話し続ける。自分は両親が入っている納骨堂に入るつもり。でも重一は関西にある実家に納まる

勢い、千夜が「夢」を取り仕切るようになり、私も応援に行くようになった。ばりばり捌ける娘の千夜と、どんくさい母親の私とのコンビ。最初はどなることかと気が重かったが、一週間もすると少し慣れてきた。もつとも私は皿洗いとか野菜を洗ったりとかの雑用専門。常連客の中には須美さんを心配して声を掛けてくる人もいる。私が不器用な手つきでコーヒークップをテーブルに置くと、

「ああ、あの絵を描いた方ですね。須美さんから聞いています。次の個展はいつですか？」

と言ってくれたりする。時には孫娘の可奈も会社が休みの土・日にはふらりと現れて手伝ってくれたりして、女三代があまり広くもない店内をうろろする図になる。可奈は社会人になったばかり。隣の市で一人暮らしをしている。可奈は何かにつけ、要領が悪い。不器用なのだ。母親には似ず、私に似たのかもしれない。隔世遺伝かなと夫は笑う。可愛くてしかたがないという顔で言うので、仕事を理由に子どもに構ってこなかったことへの罪滅ぼしかと秘かに思っている。

「あっ」

今日も可奈が大きな声をあげた。洗剤で手が滑り、コーヒークップにひびをいれた。千夜が睨んでいた。

新しい年が来た。年末、年始は例年に多く忙だった。

自分の家のことと「夢」で頑張る娘の家のことと。気ばかり焦って、結局、何ほどのこともできなかったが、一年が無事に終わり、新しい年を健康で迎えることができた。無理に終わらせ、ばたばたと切り替えたというのが正直なところ。

「夢」は正月三日間は休んで、四日からまた営業を始めた。須美さんは気が向けば出勤し、店の二階で休んでいることもある。その分、重一さんと千夜の仕事の量が増した。私も週に二日ほど手伝いに行く。

改めて須美さんの存在の大きさに気付く。当たり前のことだ。「夢」は五十年近く、須美さんが育て磨き上げてきた場所だ。彼女が何もしなくて、ただ椅子に座っているだけで、店の雰囲気は締まる。そして誰もが安心する。

一月も二十日を過ぎたころ、私も須美さんが入院する前と同じ生活を取り戻しつつある。落ち着いて絵を描く時間が持てるようになった。

すっかり離れていた画板の前に立つ。構成を決め、一度、大地の下塗りをしたところだった。五十号の縦長の画面。画面の下から五分の四ほどが大地。大地には代赭色を薄く塗ってある。土は温かい。包容力があり、育て、守る。だから赤みを少し加えた代赭色。その上の五分の一はほの暗い空。薄墨色。大地も空も、まだ何回も色を塗り重ねる。

今日は三人の人物に初めて色を載せる。一番手前の若い

娘。大地に座り込んでシロツメクサを摘んでいる。小麦色の肌。顔も手も。座っているの足は見えない。細い肩と薄い胸。左手には何本かのシロツメクサ。洋服は山吹色の半袖のワンピース。スカートがふわりとふくらんでいる。

俯き加減の顔は笑っていない。何かを必死に探している。幸運をもたらすという四つ葉のクローバーを見つけたのだろうか。肩までの髪はまず薄墨色の絵の具を面相筆で取り、細い線で何本も描いていく。これは地の色で、あとから消墨色や墨色を重ねて黒髪を表現するつもり。

画面の左半分にすっきりと立つ四十代の女の手足は遅しい。大切な者を抱き、励まし、守ってきた大きな手。裸足で大地を踏みしめている。山吹色の半袖のワンピース。首も肩も太くて骨っぽい。それらは守り通してきた者の証。そして誇りと自信。まだまだ力を尽くすと正面を向いて立つ。髪の毛は少し長め。早くも白いものが混じり始めている。

時計を見ると午後四時だ。画業はここまで。妻の顔を取り戻す時間になった。明日は午後から「夢」の手伝いに行く。続きを描けるのは明後日だ。老女を描いて、大地いっぱいには広がるシロツメクサの群落を描いて、薄暗い空に色を重ねて。作業は気が遠くなるほど多い。グループ展の締め切りは三月。間に合うだろうか。

夕食は湯豆腐。昆布と鰹節で出汁を取る。このころ、淡

白な食材を使うことが多くなった。七十八歳と七十五歳の食事だ。たまに煮込みハンバーグを作ると、小さめのを二個、ぺろりと平らげていた夫が、このごろは一個残すようになった。私も一個で満腹。口には出さないが、すっかり少食になった。その分、夜遅くに小腹がすいてリングを食べたりする。

「年を取ると草食動物に近くなるのかね」

夫と二人で苦笑いをする。

夕食の後、須美さんの病気をきっかけにして、これからのことをぼそぼそと話すようになった。これからの残り少ない時間のこと。そして死後のことなど。

死んだら、きれいさっぱりとこの世から消えて、後は何も無くなるものか。それとも火葬された後、骨と灰と二酸化炭素の元素になって宙を漂うのか。お互い、元素になってふわりふわりと漂っているとき、と夫が急に思いついたように言った。

「元素の僕とすれ違ったとき、知らん顔して逃げるなよ」

「さあ。あなただって、女の人の元素と一緒にかもしれないし」

そんなことはない、と言いかけて、急に夫が黙り込んだ。はは。思い当る女がいる訳だ。いや、いた訳だ。過去形。残念ながら、過去形。それとも現世で叶えられなかった思いを元素になったときに叶えようというのか。残念でした。

元素になってしまったら、何もできない。手を握ることもキスをする。なにしろ元素なんだから。残念でした。思わず、ふふと笑った。そのとき、夫が恐ろしい顔で睨んだ。

「峯信一郎とは、もう会っていないのか？」

驚いた。彼の存在を夫はうすうすと気が付いているとは思っていたが、こう真顔で言われては、どんくさくて厚顔無恥な私だって慌てる。

「昔の話よ。もう四十年前も前の。それにあれ以来、音信不通、今、どこにいるのかも知らない」

ふーんと言って黙り込んだ。私も黙り込む。

彼は何年に一度か思いついたように連絡をくれている。娘が結婚したとか、孫ができたとか。六十五歳で退職して短大の非常勤講師をしているとか。それもやめて、まったくの素浪人になったとか。連絡は不意にきて、また途絶える。その繰り返し。元素になる前に一度くらいは会いたと思うが。まさかまだ、元素にはなっていないだろう。さらに考える。元素の私の横に信一郎の元素が近づいてきたら、お互いに分かるものだろうか。

ないない、と私は小さく首を振った。何しろ元素だもの。何も感じず、何も考えず、ただふわふわと漂う元素。分からない方がいいんだと妙に安心する。

「さて寝るか」

夫が先に立ち上がった。

その二日後。また絵の前に戻ってきた。老女は後回しにして、大地に広がるシロツメクサに先に色を付けることにした。老女は現在の私の姿のつもりだが、自分で自分が掴めない。人生を終えることへの覚悟がまだ定まっていなかったらどうか。

緑青は緑色の鉱石を砕いて作る岩絵の具だ。粉末状の絵の具を絵皿に入れて、溶いた膠液を二〜三滴。右手の人差し指でよく混ぜる。膠液は定着の役目をする。さらに水を少量入れて濃さを調節する。彩色筆に緑青液を含ませる。絵皿の縁で筆を軽くしごいて、そっと画面に置いていく。木炭の薄い輪郭線が消えて、緑色の葉が命を得ていく。画面の下方は大きく濃い葉の群れ。上に、つまり遠くに行くにつれて葉は次第に小さく薄くなっていく。緑青を画面に置いた途端、地面の代赭色との対比が鮮やかになっていく。葉も土も微かに呼吸を始める。息はまだ小さい。何度かの塗り重ねが必要だ。この上に白い花を点々と描いていけば、地面は輝き始める、きっと。

ふと植物も元素に還るのだと思った。花を咲かせ、役目を終え、枯れて土に吸収されて大地の栄養となる。栄養は子株に吸収され、子は成長し、子孫を残す役目を終えてまた大地に還る。循環しているのだ。人間も動物も植物も、

雪は午前中で消えて、道路はまだ濡れている。午前中の家事を終わって、さてと一息ついたとき、突然、可奈が訪ねてきた。溶けかかった雪が可奈の足元を汚している。平日だし、隣の市で仕事をしている時間帯だと、一瞬、悪い予感がした。夫もジムに行く前で、二人で顔を見合わせた。可奈はソファーに座るなり、唐突に言った。

「結婚したいの、私」

ほんとに唐突なもの言いようで、しかも思いつめた顔なので息をのんだ。

「でもお父さんもお母さんも反対なの」

言った途端に涙が流れ出した。二十三歳の若い娘のことだ、愛だの恋だのと言い出しても何の不思議もない。

「可奈。落ち着きなさい。最初から順序立てて話さないことさっぱり分らないよ」

夫がゆつくりと論ずるように言う。私が渡したハンカチで涙を拭いて、下を向いてしばらく黙っていた。そしてぼつりぼつりと話し始めた。相手は同じ会社の同じ部署に勤める三歳年上の男だという。仕事も出来、真面目な性格だが、離婚歴があるという。

「それがお父さんとお母さんが反対する理由なの。一度会ってくれたら、彼の良さが分かるはずなのに、絶対に会わないと言ったのよ」

私はふと若いころの須美さんと沢辺三郎という人との関

ありとあらゆる命が始まりと終わりを繰り返している。地球の誕生から、いやそれ以前から延々と続いている宇宙の歴史。人間の八十年の営みなんて、ほんの一瞬のドラマに過ぎない。しかし、その中で愛し、憎み、悲しみ、喜ぶ。なんと可愛らしい存在なのだろう。

手を止めて、ふーっと息を吐いた。何もがむしやりに頑張る必要はないのだ。今のこのときにできることを誠実に積み重ねていけばいいのだ。肩の力が抜けて、心が落ち着いた。

一月も終わり近くになった。

夜来の雨がいつの間にか雪に変わったようだ。朝早く、ベッドの中で、静まる外の世界を感じる。雪が音を吸収している。何時だろう。枕元の日覚まし時計を見ると、まだ五時だ。耳が冴える。車の通る音もない。雀の鳴き声もない。闇の中で息をつめて耳を凝らす。静かだ。

「積もったのかな」

隣のベッドで咳く声があった。黙っている。静寂が壊れるのが惜しい。やがてまた寝息が聞こえてきた。

突然、庭ではざりと重い音がした。積もった雪が落ちたらしい。湿り気の多い牡丹雪かもしれない。雨は良くないことの予兆。雪は幸運の予兆。昔、誰かから聞いたことがある。もう少し寝よう。毛布を鼻の上まで引き上げた。

りを思い出し、慌てて頭から振り払った。人は大したことのない存在で、でも大した存在であろうと願うものだと教えられた。話が複雑になりそうで、不安になる。

「それで、相手の方は何と言っているの？」

「自分は傷のある人間だから、無理は言えない。反対されても仕様がなし、と言うのよ。ほんとにじれったい」

可奈の一方的な思い込みという可能性もある。それに離婚の原因はなんだろう。離婚してから、どれくらいの時間が経っているのか。それに離婚が傷だろうか。人は誰でも失敗する。大したことのない存在だ。彼はその失敗をどう受け止めているのか。

可奈の話聞きながら、ふと自分の描きかけの絵の中に可奈を置いてみた。大地に座り込んで必死に何か大切なものを掴もうとしている。そしてそれを見守る七十五歳の老女の私は……。ようやく安堵のとき、安楽な時を得られると思った矢先、とんでもない難題を押し付けられた。のんびりと寝ている場合ではないということか。やれやれ。

夫はうんうんと相槌をはさみながら、辛抱強く孫娘の話の話を聞いている。

夫の思いがけない一面を見て驚いた。まだまだ、この人の全部を知らないのだと思う。話すだけ話す可奈も少し落ち着いてきた。

「まず私たちがその青年と会ってみようか」

夫が私に言う。ただし千夜たち夫婦の承諾を取ったうえでのことだと。可奈は素直に頷いた。胸の中のために込め込んだものを吐き出して少しほっとしたのである。遅い昼食と夕食まで食べて、夫が最寄りの駅まで送っていった。帰ってきてすぐに、夫が頭を抱えた。

「大変だ。年を取ったら肩の荷を少しずつ下ろして、楽になるものだと思うのだが」

「ほんと。これじゃあ、のんびりと元素なんかになっていられないわね」

午後七時を過ぎて「夢」が暇な時間帯になってから、夫がスマホを手にとった。明日午後三時に、二人で「夢」に行くことになった。絵の中の老女の姿がぼんやりと霞んでいく。どう描いたらいいのか、分からなくなってきた。

次の日の午後。夫と「夢」に向かう車の中で、ふと重いさんに聞いた屋久島の巨大杉の話を思い出した。とても絵の中に閉じ込めることなどできない神秘的な存在であると。絵には限界がある。きっと文章にも限界がある。それらを超える大きな何かがあるのだろう。そう考えると肅然となる。だから人間は謙虚であるべきなのだ。描けるだけ誠実に描けばいい。書けるだけ誠実に書けばいい。そうすれば、きっと何かが誰かの胸に届くはずだ。

車は花牟礼川に沿った国道を走っている。川向こうの裸

の木々は、あと一〜二か月で春の芽吹きを始める。

〔「季刊午前」60号より転載〕



西田宣子

にしだ のぶこ

- 1945年生まれ 福岡教育大学卒業
 1991「青い魚」で福岡市市民芸術祭賞
 92「マウス・ブルーダー」で九州芸術祭・福岡県地区優秀作
 94 同人誌「季刊午前」同人となる
 98 「チョウチンアンコウの宿命」で『文藝』1998年度上半期同人雑誌優秀作
 99年 福岡市文学賞
 2004 「楽髪」で『文藝』2004年度上半期同人雑誌優秀作
 著書
 「チョウチンアンコウの宿命」(2013 梓書院)
 「おっぱい山」(2017 梓書院)
 「季刊文科セレクション②」(2019 / 7人の共著「風の海」所収)
 ※「白詰草」は連作
 1. 「白狐」(季刊午前 59号、主人公 35歳、下園果林)
 2. 「風の海」(季刊文科、46歳)
 3. 「白詰草」(季刊午前 60号、75歳)

季刊午前

福岡県

同人誌ならではの試みを実践

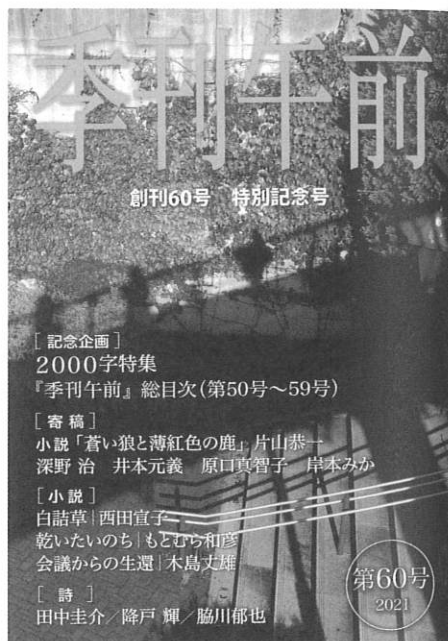
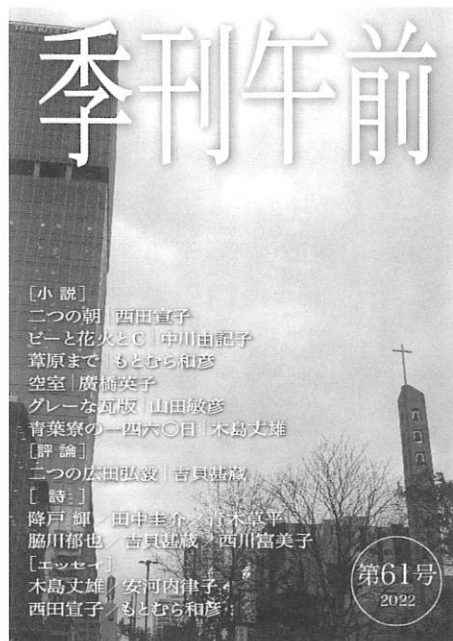
斬新な編集を心がける

戦後間もない一九四六年、福岡の地で商業文芸誌「午前」が眞鍋呉夫と北川晃二によって創刊された。その第二次、第三次の同人誌「午前」を経て、一九九一年に北川が再出発させた同人誌が「季刊午前」だ。

同人は現在(二〇二三年四月末)一七人で、この中から編集委員の中川由記子、廣橋英子、安河内律子、吉貝甚蔵、脇川郁也の五人が企画立案や寄せられた作品の掲載の可否など合議制をとっている。他に特別同人に岸本みか、原口真智子、潮田征一郎の三人がいる。

季刊を謳っているが、掲載作品の質を保持するため発行の歩みは遅く、最新号は第61号(二〇二二年二月)だ。創刊以来、つねに斬新な編集を心がけており、同人誌でなければできない、工夫を凝らした企画特集を組んでいる。

企画作品を創作する中で「ある縛り」を作ることは、作家にとって新鮮であり、時にこれまで感じたことのない新たな世界を見せてくれるものだ。複数の同人が参加するこ



表紙写真は毎号プロのカメラマンに地元の風景を撮影してもらって掲載している



季刊午前

〒812-0015

福岡市博多区山王二丁目一〇・一四 脇川郁也

☎092-452-0510

稿いただいた。また同人全員が参加してジャンルを問わず原稿用紙5枚を発表する記念企画「2000字特集」を組んだ。これは発行の節目となる十号ごとに企画しているもので同人一一人が参加した。

*

「季刊午前」同人会では、創刊以来、毎月第三日曜日に欠かさず例会が開催され、発行号の同人合評会のほか、芥川賞受賞作品などをテキストとする勉強会などを実施している。同人加入希望者の見学も受け付けている。

（季刊午前）同人会事務局・脇川郁也



合評会後の懇親会

とから、「競作」という意識が芽生えることは当然で、刺激的・魅力的な取り組みである。まさしく同人誌ならではの取り組みといえるだろう。

最近の企画特集の内容を簡単に紹介したい。

●特別企画『季刊午前』四半世紀を超えて（第55号／二〇一七年）

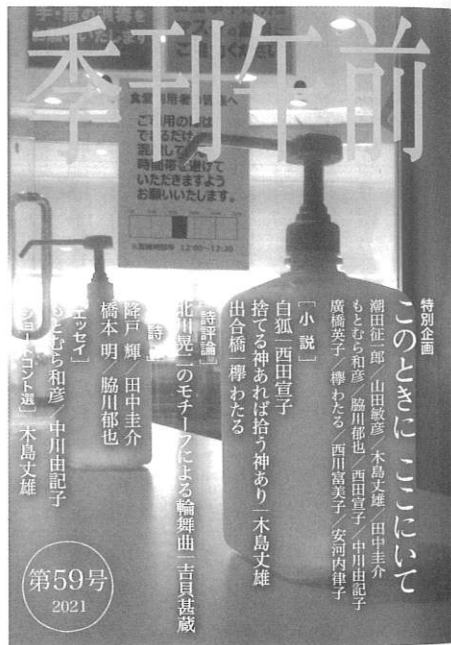
第55号の発行が創刊から二五年を迎えたことから、「四半世紀を超えて」と銘打ち特集を組んだ。福岡在住の作家・片山恭一、創刊の父・北川晃二の旧友で詩人の椎窓猛からの寄稿を受けたほか、特別同人三人が執筆。創刊時の熱い思いや当時の世相を記したほか、フィクションの可能性について論じた。

●特別企画「いつのとき」いつにいつ（第59号／二〇二二年）

二〇二〇年秋口に企画したのは、新型コロナウイルス感染症第三波の渦中に企画された。むろん月に一度の例会も中止とした。共に文学を論じ合う同人がこの新たな病によって分断された。それぞれが経験したこと、考えたこと、それを書きとめておくことが表現者として仕事であろう。この企画には同人の一二人が参加、エッセイや詩に表した。

●創刊60号特別記念企画（第60号／二〇二二年）

節目の第60号では、故・北川晃二と古くから交流のある深野治さん、井本元義さんのほか、特別同人の皆さんに寄



ユダヤ難民を救った男

木内是壽

樋口季一郎・伝



ナチスの弾圧にシベリ
きた2万人のユダヤ難

ア経由で満州に逃れて
民を、命を賭けて救っ
た日本人将軍がいた。ハルビン特務機関長樋口季一郎少将。
厳寒の中で死に瀕したユダヤ難民を人間として救済した英
傑の軌跡を辿る歴史評伝。

アジア文化社

1540円（税込／送料共）
御注文はアジア文化社まで

血の湯

寺本親平

壺

じゃらあんしゃわあんとう鳴っていた琵琶の音が消えていくと、またしても妻の声が戻ってきました。

「貴男は自分が此の世で、最も悲惨な産まれ方をした人間と思っっているようですが、もつともつと酷い惨い産まれ方をした人や、人にも為れなかった水子という者たちもいっぱいいるのよ」と、妻は冷静な声でこちらを論じております。その口調が一変して、初めての児を切迫流産で失った時の、「ごめんなさい、かんにんしてね。大切なあの児を救えなくて、許してね……」と両の目から涙をあふれさせ、か細い囁き声になっているのです。

しており、額中央の目は真ん丸で飛びだしています。

肩の付根から先のない手と股の付根から先のない脚の疵痕が瘤状に残っております。女の赤ちゃんでした。

医師は、「どうしてたてつづけに、こんな災難があなた方にやってくるのでしょうか」と、訝りつつも慰めようもないといった顔でした。妻はまたしても、「残念ですが、今度は死産でした」という医師の言葉に絶叫するばかりでした。

その泣きさげが狂気じみた声と絶望の淵で瘦せおとろえていく妻の最期の様相が、石窟の部屋にかかっている黄金色の垂幕にぼおつと浮かんできました。

それから妻はその幕の、夢景色の奥へと遠離^{とほざ}つていきます。

それでもその姿は痛ましく儂げな様子ではなく、二人の子たちの手を引いて、しっかりとした足取りで、初冠雪に映える霊山の麓を、紫がかった針葉樹の森のほうへと歩いていくのです。

妻の右の手は頭半分の子の手を、左手は一つ目の片手片脚の女の子の手を取り、三者それぞれ楽しげに見えます。女の子と男の子は時折けんけんしながら、仲むつまじく玄妙な一体感を醸しだしております。けんけんパッと脚を開くそのパツの瞬間、ないはずの女の子の片脚が顕れ、半分欠けているはずの男の子の頭が出てきて愛らしい容顔

妻の手をさすりながら、「またできるよ、またできるよ」と慰めつつけます。

ですが、医師から告げられた本当のところはと云えば、お腹の児の頭部は半分しかなく、これまであまり事例のない畸形だということでした。妻にはことの真相を明かさず、死産ということにしました。男の赤ちゃんでした。

そして二度目の妊娠がわかった時、喜び半分不安半分で食事でも喉を通らぬ妻を、「心配ないよ。今度こそ大丈夫だから」と抱きしめ励ましつづけます。

それでも事態は悲惨極まりないものでした。またしてもお腹の児はあまりにも異常な畸形だったのです。

顔の真ん中に目が一つ、左手が一本、右脚が一本、そんな惨たらしい姿です。本来あるべき双眼は潰れてのつべり

が見えます。女の子の突出した一つ目もすばまり、二重目蓋の両眼が見えます。それらはほんの一瞬の幻像でしたが、網膜に貼りついて消えません。こちらの入る余地のない気がするなか、どれだけ追いつこうとしても、三人との距離を縮めることはできません。

やがて森は幾つもの丘陵を成し、遠くを仰ぎみれば、薄紫に烟る霊山が望見され、やがて遠山歩みきたりて眼前に迫れば、手前は幅ひろい深き谿谷^{けいこ}となり、眼下には緑青の淵が白波を立てて滔々^{とうとう}と流れているのです。

息をきらせて崖縁に佇んだ時には、もう三人の姿は亡く、霧状の薄い膜の向こうには、五重の塔や幾層もの大屋根をつらねた寺院の塋^{いらい}が点在し、聚落の屋根もまた列をなして建ちならび、あちこちの家屋から竈^{かまど}の煙がたち昇り靡いております。

酒蔵も見え、その前にはたち呑みする半裸の男たちが焼鳥などを囓っている屋台らしき物もあり、随分な人だかりで賑わっているのです。柳の枝葉が小さな羽根に似た無数の若葉をつけて絡まりゆれる様は、その楊柳の合間を埋めて拡がる桜花を一段と引き立たせ、淡い翠^{みどり}の煙霧のたちこめる通路をゆき交う人々に混じり、菅笠や帯などを背負って売りあるく商人たちの姿も隠^{かく}れ、また子供等がその間をばらばらと走りまわっていたりします。さらにそんな人たちに守られるように、肘から下がない人や膝から下を

失った戦傷者らしき人などが、松葉杖に縋って蹣跚たる足取りで軀を前へ動かしております。

それでも、貴賤を問わぬ姿形の人物たちが皆、等しく自然に折りあいをつけて歩いているのが目に優しく、見おろす景全体を幽邃なものにしているのです。

こちらが息をひそめてひたすら妻と子たちを探していますと、大岩の上に陣取って細竹の先から伸びる糸に取りつけた鉤針で、桜鯛か鮎の稚魚でも引っかけて嬉々としている子等の姿を、静かに眺めている妻をどうにか見つけだすことができたのです。

憂いなく微かな笑みを湛えた妻の様子に、胸が塞がるほどの歓喜が込みあげてくるのです。息を整え、声を張りあげるまでに、大層な時を要しました。

「おおおい、おおおい。待ってておくれよ。今すぐそっちへ行くからなあああ」と両の手が千切れるほど振って合図すれば、妻も気づいてくれたか、ちょこんと首を垂らしたのでした。

「あのとき、わたしは病院で何にも食べられなかったんではないのよ。わたしはこの子等の死出の旅路に同行しなければならなかったの。貴男を独りぼっちにしてご免なさいね。復讐する時までがんばって、白髪になるまで生きぬいて頂戴。きつと、きつとですよ」

妻の声は遠い彼方から響いてくるように、ようやく聞き

とれるものでした。幼氣ない子等を見るのはあまりにも辛くないことでしたが、魚を獲る無邪気なそのふるまいに一時心が和みました。

同時に、いつかまた確かに、妻との再会が叶う日のくる気がしたのでした。

すると、再び琵琶の音が響いてきました。

「あんたを便器のなかに産みおとしたがは、あてが十九の歳やったわいなあ。臍の緒を懷に吞んどったじ首で切つて、後はなんがどうなったかわかららんまんま、一目散にその場から逃げてしまったがやわいなあ。済まんことやつた、やくちやむない為業やった。堪忍しとくれ、かんにんやとことお」

琵琶の音色に隠れて消えいりそうな低い声を、どうにか聴きとることができました。

心乱れつつも、声若き娘が弹奏する琵琶歌の悲しげな音声に運ばれ、遙かな彼岸の妻の耳にも届いているだろうかと案に從いて耳を欹てているのでした。

式

「よう来られた。此処は『遊ぶ部』という秘境の集落なが

不揃いな重層音が連山全体の巖をゆるがしているのです。

岩壁に板を貼りつけて岩床には頑丈な根太を設え、杉の床板を載せて畳を敷き、それぞれ障子や襖で日本間らしく仕立ててあります。また岩屋のなかには長屋風の湯治部屋が何列にもはめ込まれてありますが、今は湯治客が煮炊きしている気配はありません。

最も不可解なのが、湯殿の造形なのでした。

軀を洗い、さつと湯に浸かってあがる分には何ということもないのですが、長湯をすれば人によっては異変が起きるのでした。

まるで罰が当たったかのように、その人によって前世が開かれていくとのことでした。

夜半に湯に浸かっていると、素早く左足の先から入り、それから静かに腰から胸へとからだを沈めていく感じが、妻をつくりな女の姿に見えて、想わず「ああ」と叫んで切ない吐息が漏れました。常に妻の面影を求めて流浪してきた瘦身が震えます。

顔は見えなくとも、項に貼りついている濡れた後れ毛はまぎれもなく、妻のものです。ですが、少しでも軀を動かして湯面を波立たせれば、たちまち消えてしまいうそうです。

両脚の指先に神経を集中してにじり寄っていきます。静かな夜風になった心映えがして、そつとあわてずに、こちらの胸を妻の背に副わせます。

よ。平家の落人やら息子に背負われてお山参りにやってきた老母らちの、生きのこりの隠れ里よ。そしてこの湯宿は、『血の湯』と呼ばれてきた、開湯千年の秘湯ながやて」と云いながら、口元へ掌をもっていくのでした。

その湯宿の女将の顔が微笑んだとみる間に、白い漆喰に似た厚化粧の顔面にいきなり鱗が入り、ばらばらと表面が剥がれおちて、たちまち素顔が顕わになったのでした。

その素顔は赤茶色に火ぶくれて、下目蓋からも鼻の孔からも口尻からも、たらたらと血糊が滴っています。

耳朶からは黒ずんだ血のかたまりが氷柱のようにぶら下がっております。

吹雪のなか、ゆき倒れていたのを湯宿の下足番に発見されて運ばれ、初めて女将と顔を合わせた時のこともさることながら、此度もまた、新たな変化に度肝をぬかれました。「こんな顔で、さぞやびくくらこいたやろね。ほんでもなあ、気が遠なるほどの歳月、こんなとこの湯宿の女将をしとると、それに相応しい顔になろうというもんやて」と笑うて、ずるりとその顔を撫でおろすのです。

この湯宿は峨々と聳えつらなる岩山の、下方を削りぬいた岩屋に、玄関口がすっぽりはまり込んでいて、岩屋のなかには幾つあるのかわからない数の大部屋・小部屋が連なっております。その大部屋の大半に沢山の機械機が並んでおり、布を織る、ばたあんとんという音が響きわたり、

その瞬間、「またああ、誰かとおおお、間違ええええとるんやあなあのおんおんおん」とふり返ったのは湯宿の娘でした。につこりほほ笑んだ娘の顔が湯のなかに隠れてしまつと、たちまち湯面が血の色に戻り、そのなかに海鼠ねずみのような、海月くらげのような、得たいの知れぬものの揺らいでいるのが見えるのでした。恐怖よりもその形がなくならないように必死で掴もうとしていました。

そしてまず驚づかみにしたのが、娘の両足の指先でした。というより、握ったやわらかいものが足の指になったという感じでした。

「あたいのとおお両足指がああ四本しかないのおおおわかったやろいねええ」と、娘の声がぷくりぷくり湧きあがってきます。

「源平の時代から南北朝のむごたらしい世を継いで、時には血で血を洗う一族同士の争いが繰りかえされたがよね。兄弟がそれぞれの子や孫やらを殺しおうて、陰謀術策いり乱れて地獄絵さながらだわいね。そんな因果の報いの徴がこんな不具合なんかもね」と、ようやく発音が整えられ、自嘲気味の声が湯殿の天井に響くのでした。

そしてまた、「さあああたいのとおお他んとも触つてえちゃんとしたああからだにいい戻るよううう折つとくれなああ」とせがむのです。どうやら娘は言語障害も酷く、お湯のなかに身を浸すことで、やっとしゃべり方をふつう

どこからともなく、娘の歌声が聞えてきます。琵琶の音に合せて、切ない歌を唄うのです。その声がたわあんとわあんと揺蕩ゆたいながら、それぞれの血の孔あなに響きわたります。

あちこちにある大小の湯殿の一つ一つで、今も夥おびただしい数の首が洗われ浄められているような気がするのです。

その時、「ほおうほおうほおうほおう、くくうつくくうつく」と、梟ふくろうのなくような笑い声がしました。

気づけば、あ的女将が素っ裸になって、前もかくさず血の湯に入ってきていました。

「一緒に入らしてもらうねえ」と声をかけてきます。

「どうぞ、どうぞ」と血の湯へ一緒に入る奇縁を感じながら、二人でその血の温かさのなかに浸りました。

赤茶色に火ぶくれた素顔は、昼間見たように血が滲み、耳朶みみからは黒ずんだ血の塊がぶら下がっているのですが、それとは反対に下のほうは白く、女身の美しさを保持し、奇蹟のようなまぶしさを放っておりま。

異界の血みどろの湯に浸かっている自分の首を、じゃぶじゃぶと洗われている戦国の修羅の首に準なぞえば、それほど場違いな処にいるとも思えない気がしてくるのです。それにこの血の湯は、どこかに再生の力が潜んでいるように思われてきました。

「一緒に入らしてもらうねえ」という女将の籠もった声に

に戻そうとしているらしいのです。

娘がせがむ通りに、腰とおぼしき辺り、胸とおぼしき箇所を手探りまさぐりしつつ撫で、熱い菟うさぎ弱を両掌で千切るように剥がしていけば、妻の肌触りそのものが表れてきました。何としてもその懐かしいからだを抱きしめんと祈るほどに、いつしか湯からあがった浴衣姿の娘が、胸に抱いた琵琶を弾きはじめ、「これはあたいのたつた一つの楽しみながよ」と、軽やかにしなやかに、嫋嫋じょうじょうと撥を揮うのでした。その調べにのつて、娘の容姿より変じ現われては消える妻の残影を両掌で掴もうとしたその時、湯がぐるりぐるりと回転しはじめました。

するとお湯の色が、さあつと変わりだしたのです。

薄く湯気の漂う湯面が、次第に濃い赤紫に変色していつているではありませんか。

真つ赤になったお湯は、油のようにぬるりとしておるのです。

血の湯であることがよくわかりました。

石窟の孔の内部には、それぞれに黒光りした湯殿ができている、どこも血の泡がぼこぼこ溢れております。

そして壁一面には巡らされた淡い黄金色の透きとおるような、蓮の繊維を束ねた藕糸くわしで編んだ垂幕には、妻と知り合った頃の様子や子たちの生まれた時のことや幼い時分の有様が写しだされています。

聞きおぼえのある気がしたとたん、すぐ傍らにいた女将のからだがかちから離れていきました。

そして何かがすんと腑に落ちたのを境に、湯殿の景色が変幻しはじめたのです。

娘の弾く琵琶の音が洞窟に一段と高く反響したその瞬間、周りの血の湯が漏斗状に凹んでいき、湯殿全体へ拡がる巨きな渦巻になって轟音をあげだしました。

さすがに気が動転して、湯殿の縁にしがみついたのですが、軀ごと頭から渦のなかへひきずり込まれていきました。湯殿の底がぬけて、地下へどこまでも落ちていき、筒抜けになった縦穴が天高く伸びているのでした。

参

ぐるぐる廻る軀がのびたりちぢんだり玉になったり一本の棒になりして激流にのまれていきます。

そのうち血の瀑布となつてどんどん落ちていく間に眩暈がひどくなり、ほとんど意識を失いかけてました。

勢いよく、顔、胸、腹、太股、と同時に叩きつけられ、油の膜に大の字に貼りつけられた感じがして我に還りました。一瞬、粘着性のシートに捕えられた、あの昆虫の焦りと必死さが解りました。

ぬらぬらした血糊で思うように動かせない軀を、やつと

のこと反転させ見たせば、そこは広く大きな河のようでした。

天井から沢山の石灰石が氷柱となつてたれ下がり、赤黒い淀みが波うち、端のほうから洞窟の奥へ奥へとゆるやかに流れています。

その流れに身をまかせてほつとしていているうち、崖つぶちになつた巖の切れ目から、とんでもなく巨大な地底湖へと滑り落ちていったのです。

どうにか見あげれば、高々と開かれている六角形の天空は透きとおつた蒼に満ち、その中心に白銀の望月が光りかがやいています。

ふり注ぐ月魄は血の湖面を晴れやかに浄化し、信じられないくらい透明な青一色に変えていました。

湖底には夥しい数の樹木の幹や枝が縦横に積みかさなつており、極めて透明度の高くなつた水の層へ視線を差し入れてみれば、それらは凡て人の骨に見えてきました。

絡みあい貫きあつて、湖底にあるものを皆、覆っているふうでもあります。

こちらもやがてそのなかへ組みこまれていくのではないかと、おぞましく強い恐怖を覚えるのでした。

先に墮ちていつた女将の姿は見あたらず、その代わりずんと下のほうに、ぼつんと小さな赤いものが揺らめいてお

ります。

灰白色の苔状の樹皮がへばりついている巨樹は、十人が手をつないで繞つてもまだ足りないほどでした。下枝が何本も段々になつて四方へ張りだしております。

上へいくに従つて、それは少しずつ細くはなつていきますが、何十層にも重なる枝や幹は、瑠璃色に月光を乱反射して目が眩むばかりです。

全容を仰いで見れば、宇宙樹といった景色で、あちこちの幹枝には数多の落ち武者の首や、女官らしい女人の首がまるで雛壇に飾られているかのようにたわになつております。その間には修羅の太く逞しい腕や刀が反りかえり、又逆に白くふつくらとしたそれでいてなやかな女人の細腕から、手首の先に撓う手の甲に、掌は紅葉のように表になり裏になりして翻つております。

その無量無辺に拡がる幻視の像が水の風に吹かれて漂い、ばあつと種子花粉が舞い散るなか、凋落の夕映えと蘇生の朝焼けとが繰り返して映しだされていきます。

目が眩みました。

一歩二歩退いて見たせば、ふくよかで慕わしい本来の女将の相貌が顕れ、大樹全体を例の長羽織がすっぽりと覆っているのです。女将の眩くような、念仏を唱えるような声が届いてきます。その贖罪を感じさせるか細い声は、確かに以前耳にしたものでした。

丘の麓の岩壁の正面あたりには、半円形の穴が空いてお

女将の行方を捜そうと思いきり胸いっぱい息を吸いこみ、心得のある素潜りでどんどん深みを目ざしました。

そして辿りついた湖底に建つ、朱色の鳥居にかけられていたのは、日中、女将が纏つていた奇抜な金糸銀糸が入っている、藕糸で織られた黄金色の長羽織でした。

網目模様で絡んだ人骨のなかには、当然の如くに骸骨がひしめき合い、馬蹄の響きと共にどつと上がる鬨の声となり、槍や刀の打ちあい咬みあう音になり、弓の軋みやひょうと飛びかう矢音ともなつて、速い汐の流れに揉まれぶつかり合う触先の炸裂音など、戦場の音響の凡てがいり乱れ、果ては螻蛄を巻く巨大な渦にひきずり込まれたと思う間もなく、陵かと見紛う白い丘陵の麓に建つ、鳥居の前に着地したとたん、それらの轟音はたちまち消えうせてしまつていたのでした。

そこに点滅するあらゆる物象が源平の昔から続いてきた落人たちの、苦難の標しと偲ばれました。

鳥居をくぐり、ゆるやかな段坂を泳ぐように上がっていきます。

もう息継ぐ必要もなく、自分が大山椒魚にでも化つたかの如くに、軀全体が自然にくねりだし、鰓呼吸している気分になりました。

白い骨が堆く積もつた丘の頂上には、名も知らぬ一本の巨樹が立つておりました。

り、なかは空洞になつていて、天井はかなり高く伸びております。

そんな自然な祠のなかには、一体の宝蔵菩薩が安置されていました。

その前に跪き拝顔すると、どこことなく妻の面影が偲ばれました。もう妻がいらないことを承知しながら、他国を彷徨い、良く似た女の人を見かければ、つい後を追つたり、前へ廻つて面立ちを確かめようとしたことは枚挙に暇がありませんでした。

木彫りの佛のなかに隠見する妻の顔を必死に見つめながら、その名を呼びかけ掌を合わせます。

公園の和式便所に産みすてられていた出自の、天涯孤独の自分に、そんなことは意にも介さずに剛うてくれた、たった一人のかけ替えない女性でした。

すると、呼びかけた菩薩の両眼から、つうーと一筋の血涙が滴りおちました。それを見て、妻がこの血の湯とその湖底へ導いてくれたのかと思いました。

そして妻が自分と暮してくれた所以も解つた気がしました。

「待つてたわ」と、妻の声が聞こえました。

二人の子たちもその傍らに笑顔で立っています。

思わず我に還つてみれば、夕霧漂う薄暮のなかに、懐かしい我が家と木工の作業場と、その周りの木立や草花が動

画のように、もわあっとたち現れておりました。それを夢幻の景色と怪しみつつも、かつての命の営みと鼓動がひたひたとうち寄せてきます。

築何百年も経っているように見える古民家に、あらゆる種類の昆虫をはじめとして爬虫類など、棲息する数多の生きものがまわりついて、命を繋ぎつづけているのです。

山棟蛇や小さな黒蛇から腹までが周りの叢にひそみ、天井裏の梁や部屋の鴨居などには、太く長い青大将が、我がもの顔にのたりのたりとくねり巡っております。あちこち脱殻だらけです。

蜥蜴などはこそそこそ走りまわって壁や障子をがさつかせています。家守は俺たちこそが先住民とばかり、硝子戸に横柄な貼りつき方をしてびくともしません。

蟻の行列などが地面いっばいに黒々と拡がっています。蠅や蚊に至っては、両手で払っても追っつかないくらいうるさく飛びまわっているのです。

百足はやたら大きく、逃げ足の速さは驚くべきものです。巖のような蟻蛙の鳴声は地鳴りかと恐怖を覚えました。

一緒になって二人で住んでみて、自分たちが原始人になった心持ちでした。妻はそんな生きものたちを目にする度に、どこから出るのか信じられないすつとんきょうな叫び声をあげてしがみついてくるのでした。

それでも、その蛇や蜥蜴や家守をはじめ、沢山の蟻や蛙

くのでした。

さらにその音色に應えるように、どの岩屋の血の流れも滾りたち騒ぎだすと、飛沫をあげた太いうねりとなって立ちあがりました。

それは途方もなく巨きな生きた龍の形を為し、天空へ昇りはじめました

血をほとばしらせた昇龍は天地を巻き、咆え猛りつつどこまでも飛翔していきます。

我ら親子の魂を永遠の地へ運んで行くこうとしていくようでした。

鋼のような鱗がびしびしと風に鳴り、長くうねる二本の鬚は龍体のくねりにあわせて靡き、頭部の両端から生えた逞しい角はびゅんびゅん風を切っております。

天翔る融通無碍な飛行体となっていく血龍に何もかも任せていくだけでした。

爛々とかがやく真つ赤の双眼は蒼穹の彼方まで見通し、両の前足でがっしり握った命の水晶玉は当方の未来を照らしてくれているようにも見えます。

やがて血龍は灼熱の大気圏を突きぬけ、さらに高々と星々が煌めく天空へのぼつていきます。夜空には稲光がはしり、夥しい数の流れ星が過ぎっていきます。

気づいた時には天の川を見舞う、天湖と思われるところの表面へ、血龍はこちらが入っている水晶玉と妻が入っ

たち、昆虫たちは、そのおぞましい蠢きのなから、日々新たな血の盟を生みだし、不思議な光芒を放ちはじめののでした。

その様相を見て、妻が云いました。

「この子たちを抱いて。わたしを抱いて」

痛ましい子たちを引きよせ、渾身の力で愛しい妻を抱きしめました。

すると絡みあった蛇たちが放ちはじめていた光りはいつそうの眩しさを帯び、ますます膨らんで大きくなり空中へ昇っていくにつれ、地表へ向かって月明かりを凌ぐほどの強烈な光を放っていきます。

月魄を呑みこんでしまうほどの、皓々とした光線は遍く地表を照らし、聚落のふもと一面に遠くまで拡がる湿地帯は大鏡となり、やがてその鏡面に咲きほこるであろう、薄紅色と純白の蓮の花々を蔵した小さな新芽がぶくぶくと泡を噴いているかのようです。

満月の真白き光が耀き、また朝陽夕日に染まる深紅の景は別乾坤としか云いようがありませんでした。オーロラの棚引く閃光が映っているような絶景かもしれません。

いつしか一心に妻の名を呼び、子供たちの付けてやれなかった名を呼びつづけました。

するとそれと呼応するかのようには、撥音激しき琵琶の音が天上から降りそそぎ、天地の凡てを変えていくほどに轟

ている玉をしっかりと握って見事に着水しておりました。

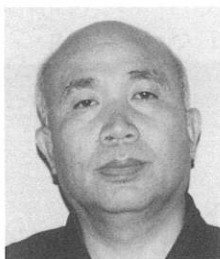
一方の玉のなかでからだを丸めた妻の両の掌には、七色にかがやく小さな水晶球が握られています。その珠にはそれぞれ二人の子たちが眠っていました。

こちらの玉と妻の玉の間には、天の川が横たわっているように見えました。

星々が集まった広大な天の川の水辺に、今は昇龍は長大な大船と化つて白い巨体を浮かべております。

家族四人してその大船に乗り移り、永遠の大河へ船出せんとしたとき、星雲は壮巖に渦巻き、始源撚拌の歌が謡われ、一際簫条とした琵琶の音が鳴り響いてくるのでした。

（「繫」3号より転載）



寺本親平

てらもと しんぺい

- 1943 金沢市生まれ
- 62 金沢桜丘高校卒業
- 74 文芸誌「渤海」同人
- 92「遠州豆本の会」会員
- 2005「卯辰」文学界上半期同人雑誌優秀作
- 同年 第33回泉鏡花記念金沢市民文学賞授賞
- 07琵琶演奏者として「奏拳の会」を主宰 後進の指導に取り組み現在に至る
- 22 文芸誌「繫」（富山）同人

北陸の新興同人雑誌

一年半前に創刊し、この年の春で四号を迎える新興の同人誌です。初号の発行は小さな切っ掛けからでした。

富山の高志の国文学館内ロビーの一角に「プチマルシェ」という文芸関係の同人誌販売コーナーがありまして。以前加入していた同人誌「渤海」が終刊し、自身の発表の場がなくなり、細々と書いているだけでした。誰にも読んでももらえないので、張り合いがないものでした。締切りがないと書けない自身の不甲斐なさもありましたので、内心では地元富山の同人誌に参加するつもりになっていました。誌歴があり、知り合いもいる少数メンバーの同人誌を一冊買い求めました。

同人誌の販売コーナー全般を見ているうちに、たまたま「文学フリマ」金沢という無料の小冊子が目に止まりました。有料だとしたら、持ち帰らなかつたでしょう。これが切っ掛けでした。

既に開催が終了した金沢での「文学フリマ」を案内した小冊子でした。アニメのフリマは聞いたことがあるのですが、「文学フリマ」では文芸等の同人誌の販売や交換を通じての、交流の様子が窺い知れました。



若者世代は文学離れが進んでいるものとばかり思い込んでいましたが、それは間違いでした。どの世代でも文学愛好家はいたのです。しかも、電子書籍等の媒体ではなくて、紙ベースで同人誌を発行していたのです。それを見て心強く思ったものです。

それでも、若者とは世代ギャップがあるし、それらの同人誌に参加は無理だろうという気持ちで小冊子を見ていました。その小冊子の印刷所の広告欄に目が止まりました。印刷物の仕上がり予定料金を見て、格安に印刷できる実状に驚きました。ネット上で印刷データを入稿するだけだからです。

小冊子の一部にはワープロソフトで同人誌を簡単に作成する方法が載っていました。パソコンの周辺機器使用症候群の傾向が自分に元々あったので、試してみたくなりまし

た。

自作の稚拙な短編を一つ仕上げました。創刊号に載るなら、もっと気合を掛けて書けば良かったと、今は後悔しています。取り敢えず、ワープロソフトで見本誌を作成してみました。至極、簡単でした。以前なら、印刷所が使用していたような、業者専用ソフトの機能が、ワープロソフトに組み入れられていました。本来は複雑なはずの書式が、簡単に設定できるようになっていたのです。

実は同人誌「渤海」終刊時に、後で「繋」同人となる深井氏から新しく同人誌を立ち上げないかと勧められていたのです。発刊方法がよくわからなかつたこともあり、何もしないでいました。要は自信がなかつたのです。

自作品一つを掲載した見本誌ができました。自宅プリンターで汎用紙に印刷して、ホッチキス止めただけででした。それでも、見えなかつたものが形となって可視化できるようになったのです。同人誌の仕上がり具体がイメージできるようになりました。旧同人のメンバーの深井、内角氏の二人に見本誌を見せて、参加を求めました。二人は二つ返事で快諾してくれました。そこから、同人誌発刊の覚悟ができたのです。すると、物ごとはとんとん拍子で進んでいきました。やってみると「繋」の創刊は思った以上にスムーズでした。

自分で同人誌を主宰するなど思ってもいませんでした。





「繋」合評会 2023.5.14 富山県民会館にて

当初は同人誌の発刊など避けていました。創作に専念したいというのは口実で、面倒なことはやりたくないというのが正直な気持ちだったのです。今は編集作業自体が楽しいです。

取り敢えず、三人での創刊となったのでした。旧同人誌の繋がり役立ちました。最小人数での創刊でしたが、合評会は必須の行事としたかったのです。目の前に読者がいるという感覚が必要だったからです。一つの作品に対して、読者の数ほど受け取り方は違うもので、そんな受け手の声を聞けるのは、合評会の醍醐味だからです。

コロナ禍の令和三年一月に創刊号の合評会が行われました。参加者はたったの四人でした。同人以外の参加が金沢の飯田氏でした。創刊号は見た目にも薄っぺらで、発刊ノウハウ不足が如実でした。それでも、飯田氏から掲載作品について、しっかりと感想を聞くことができました。

飯田氏も旧「渤海」メンバーでした。一時、諸事情で音信が途絶えたこともありましたが、たまたま創刊に伴い連絡を入れました。関係が復活したことになります。そして、それを機会に二号に作品を寄稿してもらいました。おかげで、二号はページが整って、背表紙ができる厚さとなりました。以前からの人の繋がり役立ちました。

さらに、飯田氏と同じ時期に「渤海」同人だった寺本氏に声掛けしてもらい、三号寄稿、四号加入となりました。

繋 第4号／目次

小説

観音参り 寺本親平 4

卯辰の一本松 飯田 芳 22

極楽図書館 池田良治 34

解脱 内角秀人 50

腹いっぱい馬 藤野 繁 64

幻楼 むらい はくどう 84

掌編

お庭にお花を 飯田 芳 29

小品

ただ、ただ…… 深井 丁 74

合評会案内

あとがき

池田氏は寺本氏の推薦があり、寄稿を経て、正式加入となりました。三号から新加入の藤野氏は内角氏の作品を通じて参加されました。

有象無象の関係性の中で、想いや志を共にする人々の、輪が拡がり、繋がりました。現在の同人は七名で、幸いにも四号は全員オールキャストで作品を掲載できました。最低二人でも同人誌は発行可能です。次号以降で、誰かに不可抗力的な事態が発生したとしても、他の同人がカバーしてくれるでしょう。

持続可能な同人誌として、今後最低十年は発行を続けたいという願いがあります。深井氏が常々述べるように、世の中を驚かすような、傑作が生まれる場所として、この「繋」を存続していきたいものです。

(編集発行人／村井博道)



「繋」

T930・1301

富山県富山市馬場町三〇 村井方
TEL 076・483・0402

村井博道

見返り

佐藤文平

三国民雄から思いがけない便りを受け取ったのは、十二月に入り何となく世間がせわしくなり始めた頃だった。

桜井憲二は読み終えた三国の葉書を座卓におき、ぬるくなつたお茶で喉を湿らせてから腕組みをした。届いた喪中欠礼で奥さんが亡くなつたのを知り、あまりに突然のことで驚いている、ついでには近々どうしても上京しなければならぬ用事があるので、その折貴兄の都合のつく日に伺つて線香を上げたいのだが、といったことが見覚えのある癖字で簡潔にしたためてあつた。

三国は桜井が勤め上げた試験研究に携わる政府関係機関で同期入所の男だったが、お互い同じ年に定年退職してからすでに十三年の年月が経つていた。その間現職の頃ならいざ知らず、仙台に終の居を定めた彼と個人的につき合う

じめてのことだ、と仏壇の前に座つて菊恵の遺影に報告して手を合わせる。あら懐かしいお名前ね、でも私たちを引き合わせてくれた恩人には違ひないんだから、せいぜい欲待してあげなくちゃね、とささやいたような気がした。

あれは二人が三十二歳の時だったから、もう四十年前も前のことになる。職場は自然や環境を対象にした試験研究を行う機関といつても、高卒で入所した桜井たちは大卒、それも国立大出が殆どの研究者をサポートする事務職として採用されていた。二人が入つたのは東京のS区にあった本所だったが、北海道から九州までの各地に七箇所の支所を持つ職員数七百名程の全国展開の組織だった。

新米の係員として入所して十四、五年程経験を積むと、そろそろ係長への昇任の話が出てくる。もう一人を加えて桜井たち同期三人はちょうどその順番に当たっていたのだ。ところがその年は定年退職者が一人で、従つて係長ポストもひとつしか空く予定がなかった。つまり三人でひとつの椅子を争うことになった。するとここで思いがけないことが起こつた。もう一人の佐々木という男が、自分の車を運転していて人身事故を起こしてしまったのだ。勤務時間外だったがそのことで彼は嚴重注意という行政処分を受けた。処分を受けた者の昇進など規範上もあり得ず佐々木の脱落が決まつた。残つたのは桜井と三国の二人、どちらかを決

ような氣心を許した相手ではなかったし、せいぜい一年一度都内で開催される職場のOB会でこれまでに何度か、それも短時間儀礼的に挨拶を交わすぐらいの間柄だった。その彼がわざわざ都心からかなり隔つた八王子にある桜井の家まで亡妻の弔問に訪れたいというのだ。

あのこと以外に桜井には彼がやつてくる理由が思いつかなかつた。でもそこまですることだろうか、線香のギフトでも送つて弔意を示すぐらいの感じじゃないのかといふかつた。忘れることはないにしても、ずいぶん昔の記憶もかなりおぼろげになつてのことだ。まあ彼には彼なりのけじめの付け方があるのかも知れないが、いずれにしても来たいという者を断る理由がこちらにあるわけではない。

三国がわざわざここまで来るそうだと、そうなれば何とは

めるのは総務部の部課長会議の場だった。

ある日のその会議が終わつた後、桜井は戻つてきた直属の課長に「ちょっと」と前の小会議室に呼ばれた。恐らくこの会議で人事の話が出るのだらうと、期待と不安の入り交じつた落ち着かない時間を送つていた桜井は、一度大きく深呼吸をしてから課長の後に従つた。

「悪いけどもう一年待つてくれ。来年は間違いなく上がるから」

喫煙者の課長は会議室のテーブルの向かい側に桜井を座らせ、せわしく煙草に火をつけうまそうに一度深々と吸い込み吐きだしてから、いくぶん沈痛な面持ちになつて言つた。今の煙草嫌いの部長になつて以来会議中は禁煙だからずいぶん我慢してたのだろう。

「ということは三国が」

半々の期待が外れて桜井はさすがに落胆したが、何となくこうなるような予感がしていたのだ。自分の方が彼より能力が劣っているとは思われないが、こういった場合のくじ運のなさには自覚していた。

「俺も桜井を押し上げようと思ひぶん頑張つたし、君のことを推薦してくれた他の課長もいたんだけどな」

「結局どこが違つたんですか」

「能力とか勤務成績で君が劣るとかじゃないんだ。そんなことじゃなくて」

二本目の煙草を引き抜いたので桜井は素早くライターを手にとって火をつけてやる。

「要は長いものには巻かれるということだ」

すぐに意味が呑み込めず桜井は課長の次の言葉を待った。「三国の父親というのが宮城の県議会議員をやっている、地方政界ではかなりの有力者らしく、地元選出の国会議員を通じて本省の研究開発課に働きかけて、そこからうちの人事課長に三国民雄のことをよろしくと言ってきた、ということのようだ」

こう憮然として言って、課長は自分自身を納得させるように二、三度小さく頷いてみせた。桜井はまったく思いがけない話に驚きすぐに言葉が出てこなかった。

「出先の、それまたかが係長云々の話に国会議員まで首を突っ込んでくるんですか」

「何も国会議員だから何でも言いなりになるわけじゃなくて、円滑な人事をやるためには本省も含め、あちこちに貸しを作っておくことも大事なんだよ。人事課長も大所高所に立っての苦渋の判断だったんだと思う。でも、これは君にとってはアドバンテージになるんじゃないか。来年昇進するときうまく使えないとも限らないぞ」

今の話は君の胸の中にだけしまっておいてくれと釘を刺し、課長は彼の肩を結構力を込めて叩いた。励ますつもりだったんだろうがかなり痛かった。顔を寄せたときの彼の

桜井はわざととほけてみせたが、内心は穏やかではなかった。

「昇任のことさ。なんで俺じゃなくこいつなんだと腹を立てているんだろう、よく分るよ」

神経を逆なでするような言い方だった。

「そんなことがよく言えるな」

親の七光りでなっただけに、という言葉をかろうじて呑み込む。

「誤解するといけないから言っておくけど、俺別に親父に頼んだりしてないからな」

胸ぐらをつかんで一発ぶん殴ってやりたい衝動を、握ったハンドルに力を込めて何とか堪える。

「そんなとってつけたような言い訳することないじゃないか。立派な親を持ったおかげだとはつきり言えよ。実際そのとおりなんだから」

「やっぱり分つてもらえないのか。俺たち別に敵同士でもないのにこうして反発し合って、なんか馬鹿げているよな」

三国はここで少し言葉を切ってから続けた。

「俺、信じる信じないはそっちの勝手だけど、うちの課長に、桜井を先に下さって頼んだんだ、俺は後で構いませんって」

どんな顔してこんな途方もない嘘をつくんだ、と思わずちらつと横顔を見てしまふ。

脂臭い息に閉口しながら、桜井はなるほどものは考えようかと思うと悔しさも幾分緩和された気がした。

それからしばらく経った三月のある日、桜井は選りに選ってその三国と茨城のつくば市へ日帰り出張することになったのだ。元々彼の係長が行くことになっていたのが、身内に不幸があつて急ぎよ筆頭係員の桜井が代わりに指名され断れなかった。東京からつくば市に移転した別の研究機関の新しく出来た研究施設を、こちらから頼んで見学させてもらう約束をしていたので、キャンセルできない事情もあった。

車で片道二時間以上かかる距離なので、二人は朝早めに出動して往きは桜井の運転で出発した。もちろんお互い程なく発令される、三国の係長昇任を含む四月一日付けの人事のことは分っていたので、しばらくは何となくぎこちなく、やむを得ない話以外殆ど口を利くこともなかった。かなり行つて国道六号線を進み、利根川を渡って千葉県から茨城県に入った頃には、さすがに狭い車内に隣り合つていつまでも黙りこくつてもいられなかった。

「俺、桜井に謝つた方がいいのかな」

助手席の三国が相手の腹を探るような言い方で口火を切る。

「藪から棒に何のことだ」

「でも、もう決まったことだからと断られた。もうやめるけど、本当だよ」

二人の話はこれ以上続かず、桜井はその後ずっと彼の真意を測りかねて気持が屈託していた。自分に卑劣な男だと思われるのがいやで偽善者を装っているのか。いや、普通人間はそこまではしなないと思うと、ひよつとして本心を吐露しているのか。三国という男が分らなくなった。

施設の見学と先方との打ち合わせもすませ、適当な所で昼食を摂った後二人が帰途についたのは午後一時を少し回った時間だった。帰りは三国がハンドルを握った。話は弾みようもなく桜井は早く職場に戻りたかった。三国も同じ思いなのか、殆ど口を利くこともなくただ黙々と車を走らせた。都内に入り気が緩んだのか、三国がたびたび欠伸をするようになった。桜井もいつもより早起きしたので、時折出そうになるのをかみ殺していた。少し休憩するよう言おうかと思ひ惑いながら、それでも後十五分ぐらいの所までたどり着いた。見慣れた景色が見え始めて桜井がほつとしたとき、あつ！と言う三国の声がして車が左側のガードレールに突っ込んでしまった。桜井はかなりの衝撃を受けて眠気は完全に吹っ飛んでいた。二人はあわてて車を降りしずつへこんでいた。

「この程度ですんでよかった」

桜井は思わず声にだして言った。よそ見でもしたのか、動揺しているだろう三国を落ち着かせる意味もあった。住宅地の小さな公園がある辺りで、周囲を見渡しても目撃者らしい人の姿はなかった。

「とにかく警察と職場に連絡してくる」

少し行っただころの薬局に公衆電話があるのが分っていた。言うまでもなく携帯電話など影も形もない頃の話だ。

「ちょっと待っててくれないか」

呆然と立ち尽くしていた三国が引き留める。

「どうした」

「お願いがあるんだ」

思い詰めたような表情で言った。

「こんな時になんなんだ」

桜井は不審に思いながらも聞き返さざるをえなかった。

「運転してたの、桜井だったことにしてくれないか」

こう言っただかと思うと何といきなりその場で土下座をしたのだ。

「その代わり、この見返りは必ずきちんとしてもらおうから、この通り頼む」

額が地面につかんばかりに頭を下げるのだった。

「三国」

まるで時代劇の一場面を見せられているようで桜井は面食らった。

で保険で補えたし、処分はないにしても始末書ぐらいは書かされるかと思っていたのが、課長から形式的に口頭で今後気をつけろと注意されてあっけなく一件落着となった。

四月の人事異動で三国は大阪にある支所の係長として栄転していった。研究所は原則として地場昇格を認めていなかった。係長や課長になるには地域を異にしなければならぬという不文律があった。昇任試験がない代わりに全国の組織を円滑に運営していくために編み出した苦肉の策とも言えた。偉くなって給料も上がるがその代わり苦労も伴うということ、ある種の整合性が保たれているというつもりなのだろう。

三国が大阪に去って数ヶ月が経ち、彼のことも見返りなるものの存在も忘れかけようとしていたある日、桜井のアパートに三国から一通の手紙が届いた。思いがけないことだったので、封書をちゃぶ台の上におき見知った宛名の右肩上がりの癖字をしばらく眺めていた。仕事に関係したこととなら職場に電話をすれば済むこと、自宅にわざわざ私信を送ってきたということは例の見返りの件に違いない。案内外律儀なやつなんだと見直し、僅かな期待感と好奇心に駆られやおろ手紙の封を切る。

はじめに仕事の方はこちんまりとした所帯なので話が早い反面、その分人間関係が濃密なこともあって、特に地元採用で異動しないため相当年上なのに係員のままでいる人

「人が見たら変に思うぞ、いいからそんな馬鹿げたことはやめろ」

「一生に一度のお願いだ、聞き届けてくれ」

上げた顔から何が何でもといった必死さが伝わった。その時この男が無性に醜く哀れに思え、桜井は思わず顔を背けざるを得なかった。

佐々木は勤務時間外だったが、人身事故を起こしたという理由で処分を受けた。ましてや三国は勤務中に自損事故を起こしたのだ、無事にすむはずがない。ペナルティーとして昇任人事も取り消される、ととっさに判断したのである。桜井を先に俺は後でいいと大見得切った男が、その舌の根も乾かぬうちにこの体たらくだ。そんな屈辱的な真似をしてまで係長の肩書きがほしいのか、桜井はまだ土下座を続けている彼を冷ややかな眼で文字どおり見下していた。

あの時どうして身代わりを引き受けてしまったのか、あのところ桜井自身にもよく分っていなかった。なりふり構わぬ一途さに押し切られたというより、彼の情けない姿を見ているうちにどうでもよくなったというのが正直なところである。三国が言った見返りなるものを期待したわけではないが、この男に貸しを作っておけば損になることはないだろうという思いが兆したのもあった。

事故については、車の修理やガードレールの修復はすべ

間にはかなり気を遣う、といったことが愚痴られていた。暮らしの方は東京とはずいぶん勝手が違つて慣れるのが大変で、特に妻は近所づきあいや買い物、それに加えて子育てもあつて苦労しているようだ、などため息が聞こえてきそうだった。来年は自分も同じ立場になるのかと思うと身につまされそうになった。

それに三国がすでに結婚して家庭を持っていることが、彼への態度に微妙に影響を及ぼしていることを桜井は感じていた。妻子の生活を守るんだという覚悟或は気概といったものが、あの時土下座という形で現れたのかも知れないとも。裏返せばまだ独り身の自分にある種の引け目があることを認めざるをえなかった。

「身代わりになつてくれたこと、改めて礼を言いたいと思います」とようやく本題に入る。

「あの時僕はとっさにこう思つたんです。こんな不始末をしでかしたんだから自分の昇任は当然取り消され、必然的に桜井君にお鉢が回る、でも潔癖な彼のことだ、相手のミスでなつても嬉しくないはずだし、来年堂々と上がった方が後腐れもなく彼のためでもある、と。だからお互いのためを思つてあんな提案をしたんです。賢明な貴兄はそのことを理解してくれて、しにくいことを引き受けてくれた、本当にありがとうございます。約束は必ず守りますので、今しばらく待っていて下さい」

卑屈とも思えるぐらいに低姿勢な書きぶりだった。それにしてもずいぶんくだくだと理屈を並べ立てたが、言い訳がましいというよりもものは言いよう、妙な説得力があるのが桜井には不思議だった。いずれにしてももうすんだことだ、当てにしないで待つてよと小声で呟いてみせる。

「ところで話は変わりますが、お知らせしようか？ いぶん悩んだんですが、思いきって話してしまいますね。本所庶務課の細川菊恵さんから手紙で打ち明けたことがあるんです。三国さんと同期の施設管理課の桜井さんとお付き合いを希望してるんですが、私の方からお願ひする勇氣はないし、どうしたらいいものでしょうか、と」

いきなり自分のことが出てきたので驚く。細川菊恵は確か学年が三つ下だから歳は二十八か九で、桜井自身は無論しつかりした女だ^{ひと}と思う以上の特別な何かがあるわけではなかった。

「実は彼女は僕が会計課の経理にいた頃新採で入ってきた後輩で、先輩として仕事のことや何やかやを教えた子でした、それ以来何か相談事があると頼ってくるようになります。もちろんそれ以上は何もないのは言うまでもありません」

言い訳めいた言葉をはさんで更に続ける。

「僕は迷いましたが、彼女があまりにも真剣なので、普通女性はこの胸に秘めた告白を他人にしませんし、だから

後のことだった。三国の手紙が届いてからというものの彼女のことが気になり、庶務課には各部課宛ての文書類や郵便物などを入れる下駄箱と呼ばれた棚があるので、前を通るたびに部屋に立ち寄り棚をのぞき込むすきに少し離れた席の彼女の様子をそれとなく窺った。かといってじつと見続けてるわけにもいかず、ただ存在していることを確認して納得するだけで過ごした妙に落ち着かない一週間だった。自然が相手の研究機関なのでかなり構内に雑木林があつて、昼休み二人は人目を忍ぶかのようにそこで落ち合った。

「呼びだして迷惑じゃなかったですか」

さわやかな半袖の空色の事務服とまぶしく白い膝が少し覗く丈の紺のスカート姿の菊恵が、彼の顔色を窺うようにいくぶんかすれ気味の声で言った。自分同様彼女も緊張しているのかなと桜井は思った。

「そんなことはないですよ」

朝早い時間に彼女から職場の内線電話があつたときも、ずっと予期していたことで特に驚きはしなかった。

「よかった、でも呼び出すほどのたいした用事じゃないんです。ごめんなさい、実は映画の招待券を二枚もらったので、桜井さんに助けてもらえないだろうかと思つて」

さすがに言いにくそうに話した。

「何かと思つたが、そういうことでしたか」

当たつて砕けるの心で、映画にでも誘つてみたらつて答えておきました。ごめんなさい余計なことを言つたかも知れません。それと貴兄に知らせたことは彼女には内緒にしておいて下さい。でもこれだけははっきり言えます、細川菊恵さんは本気で貴兄のことを思つていますと」

手紙を読み終え桜井ははたと考え込んでしまった。これは一体何なのだ、そもそもこれは本当のことなのか、女性が異性に対して、いくら信頼している先輩とはいえこんなことを打ち明けるものかと思つた。真つ先に三国の作り話を疑つた。女性に思われて不快に感じる男はまずいない。だから年格好の似た彼女をだしにして自分をからかっているんだ、と腹を立ててすぐ、でもこんな手の込んだいたずらををして彼にどんな利点があるんだと気づく。それにしても何か話があまりにも都合よく出来すぎている。この手紙が機縁になつて二人の付き合ひがはじまり、やがて親密な仲になり結婚の約束を交わすまでになるなどと、ばかばかしい夢物語だ、そんなことが現実になるわけがない、こう一笑に付した桜井だったが、その晩は否定すればするほどあらぬ妄想にとらわれ、悶々として眠れぬ一夜を過ごした。

図らずも特別に意識せざるをえない女性になつた細川菊恵から、桜井が実際に映画に誘われたのはそれから一週間

前もつて知つていたので何気なく応対しているけど、いきなりだつたら驚いただろうと桜井は思つた。もつたいぶるわけではないが少し考える風で黙つていた。

「おかしいと思つているでしょう」

「えっ」

「女の方からこんなこと誘つたりするのって」

「いや、別にそんなことぜんぜん思つていないけど」

「本当、よかった。私、二つ下の弟がいるんですけど、その彼が、姉貴たまには彼氏と映画でも観てこいよつて、いえ弟がそう言つて、券を二枚くれたんです」

「そうなの、でもそれって僕でいいのかな。彼氏じゃないし」

「ごめんなさい、他に声かけられる人いなかったもんで」

「そう」

「それが可笑しいんですよ」

唐突に彼女が言おうかどうか思ひ惑つていようなぞぶりを見せた。

「どうかした」

「弟つたらね、話してしまつていいのかしら」

「僕だつたら構わないけど」

「本当は意中の人と一緒に行くつもりだったんですよ。それが見事にふられて、それで私にお鉢が回つてきたというわけ」

「はあ、そうなんだ」

桜井はそれ以上言葉を継げなかった。さんさん弟をだしに使って一生懸命言い訳して、面白い女ひとだなと内心苦笑を禁じ得なかった。

そんなことで近くの渋谷の映画館で二人が観たのは何と『男はつらいよ 寅次郎ハイビスカスの花』だった。映画の中で寅さん役の渥美清が浅丘ルリ子演じるリリーに向かってつぶやいた一言、「リリー、俺と所帯を持つか」がどきどきとするほど強く印象に残った。

このときを機に二人の仲はまるでそうなることが約束されていたように深まり、いつしかお互いにとつてなくてはならない存在になっていった。特に菊恵には何が何でもといったがむしろさが感じられ、男の桜井がこれでもいいのだろうかとたじろぐぐらいだった。これが惚れた弱みということかと独りにやにやして得心することもあった。

三国から二通目の手紙が届いたのは三ヶ月ほどが経った頃だった。

「大阪での暮らしにも少しずつ慣れてきました。こちらで言うほちほちといったところですか。実は、細川菊恵さんから僕のところへ手紙がありました、思いついて桜井さんを映画に誘って一緒に観てきました。ご忠告ありがとうございます。ございましたとありました。よかったですね、後は二人の間の問題ですねと返事を出しておきました。それで例の見返

あの事故以来三国とのが意識の片隅から離れることはなかったが、これである意味約束が完全に果たされずすべてを消去していいということだ。むしろこんな素晴らしい見返りをくれた彼に逆に礼を言いたいぐらいだった。いずれにしても今では遠い昔の若き日の出来事だった。

「そうだったのか、それは気の毒だったな」

三国はこう言って少し唇をゆがめ、棚をしたお持たせの地酒を一口口に含む。桜井は見かけ上の印象は三年前のOB会の時とそう変ってはいないなと思った。いずれにしてもお互い七十三にもなったのだから、髪の毛の白さもめっきり目立ちどう見ても紛れもない老人だった。

「痛の怖さを知ったときには遅かったよ、あれよあれよという間に悪くなっていった。うちの家系は癌が殆どいらないから、徴候に気づいてやれなかったってこともあるけどな」
もう少し早く医者に診せていれば少なくともあと一、二年は、と何度も繰り返した悔いの念を桜井は新たにす。

「奥さんに先に逝かれるってのは、淋しいもんだらうな」

三国が桜井のぐい飲みに注ぎ足しながら聞いてくる。土産の宮城の銘酒『一ノ蔵』の一升瓶は仙台からわざわざ運んできたものではなく、今晩泊まるという八王子のホテルで売っていたものだそうだが、わざわざそんなことを話すのもこの男らしいな、と遠い昔の現職の頃のことを桜井は

りの件ですが、月下氷人のまねごとみたいなものですが、これで何とか収めてもらったら助かります。よろしくお願います」

やはりそういうつもりだったのか、手紙を読み終えた桜井は納得した。うすうすそういうことではないかと思っただけの。なんだかたぶらかされたような気がするが、菊恵との間がいい感じで進んでいるのにとやかく言うこともないだろう。後で承諾したあのことはこれでなかったことにすると書き送って安心させてやろうと思った。

次の年の四月、桜井は係長になって新潟にある支所に転勤した。菊恵とは月に一度か二度の割合で、桜井が上京するが彼女が新潟に赴くかして会っていた。そんな遠距離交際を余儀なくされた二人に味方したのは、その翌年上越新幹線が開通して時間が大幅に短縮されたことだった。この待ち遠しい行ったり来たり逢瀬が恋人同士の仲をより深めたのは言うまでもなかった。二年後、桜井が本所の係長で戻ってきたのをしおに二人は結婚し菊恵は職場を退職した。

彼はこれでもうやく三国に追いついたなと思った。妻を娶って一人前といった風潮がまだ色濃く残っている頃でもあった。残念だったのはプロポーズするとき、よっぽど「菊恵、俺と所帯を持つか」と言おうと思っただけに恥ずかしくて言えなかったことである。

思い浮かべていた。

「そりゃそうだ、逆にしてほしかったよ」

半分以上は本音だった。この先菊恵のいない独りの生活がずっと続くんだと考えたら気が滅入るばかりだった。彼女は少しうるさいぐらいの話が好きだったからなおさらだ。「つまらんことを聞いてしまった、すまん。それよりさっき気づいたんだが、俺たちって変だよな。たった二人しかない同期なのに、特に仲が悪かったわけでもないのに、お前のこの家に來たの俺はじめてだよな」

三国が改めて室内を見回しながらさも今気づいたような顔で言った。もう一人の佐々木は人身事故を起こした翌年一身上の都合で退職していた。係長昇進が目前なのにとみんな驚いたが、父親の急病で家業の文房具屋を急ぎに継ぐためだったと後で知った。

「今頃かと言いたいところだが、実のところ、俺もお前の葉書をもらって始めて知ったんだ。こっちは仙台のお前の家に行ったことがないから、おあいこだけだよ」

「でも変だよな」

「変だけど仕方ない。お互い三十年近く全国をふらふらと飛び回る根無し草暮らしで、ようやく自分の家を持てたのは定年間際だったんだから」

「そりゃそうだけど、それでもやっぱりおかしいよ」

三国はなぜかこたわった。桜井はふとこの男、菊恵が元

気な時に来たかったのか、だったらそう言つてよこせばよかったのにと詮ないことを思った。その時失礼しますと長男の嫁が入ってきた。

「お持たせで申し訳ありませんが」

こちらは客人手ずから持参した笹かまぼこと新しい銚子を運んできた。今は中学一年と小学五年の男の孫を入れた五人暮らしだった。

「いやあお構いなく、もうずいぶんとご馳走になつてますので」

「主人も間もなく帰宅すると思いますので、その時はご挨拶に寄らせませうね」

空いた銚子を手には嫁が下がるのを見届けてから、三国が桜井に向かつて改めて口を開いた。

「菊恵さんにお線香を上げること出来たし、そろそろ失礼しようかと思つたんだが」

「何だ、ホテルは歩いたつて十分もかからないよ。せっかく泊まりがけで来たんだ、もつとゆつくりしていけばいい。悴もお前に会いたがつてゐるんだし」

長男の耕一郎は高校で歴史の教師をしていた。今時珍しく律儀な男で三国のことを話したら、是非会つて昔話を拝聴したいと言つていたのだ。

「分つた、その悴さんが帰つてくる前に、話しておきたいことがあるんだ」

「大丈夫だ、もうこの歳だ、何を聞いても感情的になつたりはしない。だから正直に本当のことを話してくれ」

三国は一度静かに頷いてみせてから驚くべきことを語らした。

「俺、菊恵さんとき合つていたんだ。行く行くは結婚するつもりだった」

のつけから桜井は度肝を抜かれたがじつと堪えて先をうながす。

「ところがあるとき実家に帰ると、親父から一枚の女性の写真を見せられ、この人を見合いをしろと言われたんだ」

相手は後援会の有力者の娘だったが、彼は自分には好きな人がいるからと断つた。三男の彼は二人の兄のように父親の後を継いで政治家を目指すつもりはなかった。だから大学にも行かずに高校を出て就職する道を選んだ。ところが父親は頑として聞かず、二人の兄も彼を説得して渋々見合いだけはすることにした。

「人の出会いというものは不思議なものだと思つたよ。」

俺、その人、今の妻のことがすっかり気に入ってしまったんだ。一目惚れというやつなんだろうな。菊恵さんがいるのに不実だと言われても仕方ないんだけど、その気持はどうすることも出来なかった」

三国はぐい飲みをこつて喉を潤す。桜井は黙つて彼の次

「何だ改まつて」

一口大に切つたかまぼこを口に入れ、桜井はぐい飲みの酒で流し込む。

「実は俺、ずっとお前を騙していた」

うん？ といった顔で三国を見る。

「四十年前の車の事故、あれ俺がわざと起こした狂言だったんだ」

桜井は舌が瞬間凍結してしまつたようにすぐに言葉を返せなかった。四十年前まで時計を巻き戻す時間が必要だった。

「どうして、なんだ」

「お前に借りを作するためだ」

「俺に借りを？ 一体どういうことだ」

三国はぐい飲みを傾けてから思ひきつたように言つた。

「桜井と菊恵さんに、どうしても一緒になつてもらいたかつた。その一心からなんだ」

さほど飲んでいないのでそう酔つてはいないはずなのに、桜井は彼が何を言いたいのか理解できなかった。

「俺にも分るようには話してくれないか」

「もちろんだ、そのためにここまで来たんだからな。でもその前に何を聞いても、怒つたり大声を上げたりしないと約束してくれないか」

奥の方に心配そうな顔を向けて三国が言つた。

の言葉を待った。

「菊恵さんには正直に打ち明けたつもりだ。あなたのことが嫌いになつたわけではなく、もつと好きな人が現れたんです。だから分つて下さい、勝手だとは重々承知でお願いします。でもあなたに対して必ず責任はとります、と」

「彼女、菊恵はなんと言つたんだ」

「恨めしうに俺をにらんで唇を噛みしめて、何かを堪えるようにずっと黙つていたが、最後に一言、あなたにきつと後悔させてあげます、とだけ言つた」

菊恵は三国とのことは何も自分には話さなかった。結婚して四十年近く、一言も語ることなく胸にしまつたまま墓に持つていつた。家族を守るためだったのだろうが、さぞつらかつただろうと思ひやつた。桜井は何か彼に問いただすべきことがあると思つたが言葉が出てこなかつた。自分の置かれた立場を正しく見定められなかつたのだ。二人の間にしばらく沈黙の時間があつた。

「あのわざと起こした事故が、三国なりの責任の取り方というわけか」

「俺の後釜という失礼になるが、彼女を幸せに出来る人間は桜井しかいないと決めていたんだ。菊恵さんも満更でなさそうだったし。そんな時思ひがけずお前との出張が決まり、これは千載一遇の好機だと思つた」

「はじめから事故を起こすつもりだったのか」

「そうだ、これしかないと思ってた。起こす場所はあるの
 辺りと決めて、後は一か八かの賭けだった。でも桜井が身
 代わりになってくれなかったらおじゃんなので、土下座し
 たのはとっさの思いつきだった。恥ずかしいも何もなく必
 死だったよ」

桜井はとてつもないことを思いつき実行した男を改めて
 見てしまった。三国は何事もなかったかのように静かにぐ
 い飲みを口に運ぶ。

「結局、俺たちはお前の書いたシナリオどおりに演技した
 ということか」

「そんな風に考えるのはやめた方がいい。とどのつまりは、
 すべて自分たちで撰び取った人生なんだから」

「そうか、それで、菊恵は」

本心から俺と一緒にいることを望んでいたのか、という
 言葉をすんでのところで酒と共に呑み込んだ。血迷うな落
 ち着けと自分を叱り飛ばす。

「いや何でもない。でも分らないことがあるんだが、黙っ
 ても誰も困らないのにどうして話したんだ。何か心境
 の変化でもあったのか」

聞いておかねばならないことだと思った。

三国は手にしたぐい飲みを弄もてあそびながら少し考えていた
 が、

「彼女が亡くなったことを知ったのが大きかった。それと

少し考えて三国は謎めいたことを言った。

「どういうことだ」

「彼女と別れるべきじゃなかったんだ。俺に人を見る目が
 なかったと言うしかない。お前とつき合うようになってか
 らの彼女は明らかに変わった。会うたびに人間が一度むけて
 魅力的になっていき、それを俺に見せつけいやでも後悔の
 念を起こさせたんだ。そういう素質が彼女にあったのに俺
 はそれを見抜けなかったということだ。その眼を狂わせた
 と気づいた相手と、いつまでもうまくやっていけるはずは
 ないだろう」

こう話し終え三国は半分ほど残ったぐい飲みの酒をゆっ
 くりと飲み干す。銚子をとってそれに注いでやりながら桜
 井が言った。

「お前がそんな苦境にあったなんてまったく知らなかった。
 知っていたら少しは力になれたかも知れないのに」

「ありがとう、気持だけでもらっておくよ。でも彼女に復讐
 されたなどと考えてはいないから。単に身からだてた錯、絵
 に描いたような自業自得ということだ。でもここに来られ
 て、菊恵さんの位牌に遅まきながら謝れたし、桜井にもす
 べて打ち明けることが出来て、肩の荷がすっかり下りたよ。
 感謝している」

「三国」

最後に何か言うべきだ、同期として何か言ってるべき

*「季刊作家」の紹介は、35Pに掲載されています。

病氣して気持ちが揺らいだということもあるかな」と言った。
 「病氣って、そんな風に見えないけど、どこか悪いのか」
 「俺も癌を宣告された。前立腺だ、やはり見つかるのが少
 し遅かったようだ」

「そうなのか」

いきなりのことなのであとのくらしいなんだ、と反射的
 に聞こうとしてあわてて口を噤む。かといって適切な慰め
 の言葉が出てくるわけでもなかった。

「さっき今の妻とやってしまったけど」

しばらく間をおいてから三国が口を開いた。

「正しくは元の妻なんだが、彼女とはとっくの昔に別れた。
 子供二人も俺から離れていつて、実家からも見放されて今
 は全くの天涯孤独だ」

「青天の霹靂じゃないか、まったく知らなかった。一体全
 体どうしてそんなことに」

立て続けに仰天するようなことを聞かされ狼狽えるばか
 りだった。と同時にいかに彼のことに無関心だったか思い
 知らされる。

「みっともない話じゃないから、人様におおっぴらに言う
 わけにもいかないしな」

「でもおかしいじゃないか、うちのやつ、菊恵と別れてで
 も好きで一緒になった相手だと言ったよな」

「彼女、菊恵さんの予言どおりになったんだ」

だ、そうしないと必ず後悔するぞと焦ったが、どうやって
 も適当な言葉が出てこず、静かな微笑みをたたえている彼
 の顔をほうけたように見つめるだけだった。
 その時嫁がやってきて卒の帰宅を告げた。

（「季刊作家」100号より転載）



佐藤文平 佐とう ぶんぺい
 1947年生まれ
 東京都足立区出身
 「季刊作家」同人

